女夫塚古墳（女塚）

宇土半島基部古墳群分布調査報告（Ⅳ）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集

1985

熊本県宇土市教育委員会

序

昭和56年度から実施しております宇土半島基部古墳群分布調査も、本年度で4年目を迎えることになり、その成果はこれまでに『宇土半島基部古墳群分布調査報告』(Ⅰ)〜(Ⅲ)として既に報告しております。

本年度は、花園町に所在します女夫塚（女塚）古墳の確認調査をはじめとして、花園・立岡地区古墳分布調査・ヤンボシ塚古墳確認調査などを実施し、本書で述べるような貴重な成果をおさめることができました。

特に、女塚古墳が今回の調査によって前方後円墳であったかもしれないということが明らかになり、県下でも前方後円墳の多い地区として知られる宇土半島基部の前方後円墳に1例を加えるということでもあり、重要な調査となりました。残念ながら前方後円墳であると断定できるには至りませんでしたが、今後に残された問題でもあります。

調査の実施にあたりまして、文化庁・熊本県教育委員会・地権者の方々をはじめとして各方面の御協力をいただき、衷心より御礼申しあげる次第です。

昭和60年3月

宇土市教育委員会
教育長　船　田　　至

例　　言

1．本書は、宇土市教育委員会が昭和59年度国庫・県費補助事業として実施した宇土半島基部古墳群分布調査の調査報告書である。

2．分布調査事業の一環として、女夫塚（めおとづか）古墳（女塚（めづか））の試掘確認調査、楢崎（ならざき）古墳地形測量、分布調査等を実施し、その成果を本書に収録した。

　なお、昭和56年度から継続して実施してきている当該事業のなかで、昭和57・58年度の分布調査・写真測量の成果についてもここに収録したが、昭和59年度末になって緊急の確認調査として実施した宇土市上網田町字小宗のヤンボシ塚（高丸）古墳の調査内容は昭和60年度調査報告書に収める予定である。

3．関連資料として、当該分布調査地区の調査年譜・文献一覧表と、比較的入手困難と思われる2篇の論文を附載し、大方の利用に供することとした。転載を許された富樫先生に謝意を表します。

4．実測図で用いたレベルは海抜標高である。

5．遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は、木下洋介・古城史雄が行ない、一部、高木恭二も分担した。本書の執筆・編集は高木・木下が行なった。

6．出土遺物、その他関係資料については宇土市教育委員会が保管している。

7．表紙は向野田古墳周辺空中写真（大阪写真測量所撮影）。

本　文　目　次

Ⅰ　序説 …… 1
　1　はじめに …… 1
　2　調査の組織 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　分布調査 …… 2
Ⅳ　発掘調査 …… 24
　1　遺構 …… 24
　2　遺物 …… 29
Ⅴ　まとめ …… 34
附篇　1．小杉樞郎「肥後國に埋蔵するめづらしき石棺」 …… 36
　　2．富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」 …… 41

挿図目次

第1図　分布調査地区区分図 …… 2
第2図　宇土半島基部古墳分布図 …… 3
第3図　松山地区地形図 …… 8
第4図　花園・立岡地区地形図 …… 9
第5図　楢崎古墳地形測量図 …… 19
第6図　西潤野古墳石蓋土壙・石棺実測図（2基）… 20
第7図　晩免古墳地形測量図 …… 21
第8図　潤野古墳地形測量図 …… 22
第9図　晩免古墳石棺見取図 …… 23
第10図　潤野古墳石棺見取図 …… 23
第11図　女塚古墳地形測量図・トレンチ配置図… 25
第12図　女塚古墳墳丘土層断面図 …… 26
第13図　女塚古墳トレンチ実測図 …… 27
第14図　女塚古墳出土遺物実測図 …… 29
第15図　男塚古墳地形測量図 …… 33

図版目次

図版1　松山地区空中写真 …… 12
図版2　立岡地区空中写真 …… 13
図版3　花園地区空中写真 …… 14
図版4　楢崎古墳現況 1 …… 18
図版5　楢崎古墳現況 2 …… 18
図版6　女塚古墳遠景 …… 24
図版7　女塚古墳近景 …… 24
図版8　女塚古墳土層写真 …… 26
図版9　女塚古墳トレンチ検出状況 1 …… 27
図版10　女塚古墳トレンチ検出状況 2 …… 28
図版11　女塚古墳出土遺物 …… 30

表目次

第1表　宇土半島基部古墳群一覧表（木下）… 4
第2表　分布調査地区古墳一覧表（高木）…… 10
第3表　分布調査地区調査年譜（高木）…… 15
第4表　分布調査地区文献一覧表（高木）…… 15
第5表　出土遺物観察表（古城・高木）…… 31

I　序　説

1．はじめに

初年度（昭和56年度）に仮又古墳の発掘調査を行なって以来、宇土半島基部古墳群確認調査事業も4年を経過した。本年度も国庫補助事業(事業費2,500,000円、国50%、県10%、市40%)として、分布調査、発掘調査、測量など6地区の遺跡を対象に調査を実施した。またヤンボシ塚古墳の調査については、年度末に追加補助を受け行なった。

調査の経過は次のとおり。分布調査は圃場整備予定地の周辺地域の網田地区と国道3号線バイパス予定地の周辺地域の立岡地区をそれぞれ9月10日・11日、9月18日から21日に行なった。測量・実測は9月3日から6日にかけて西潤野(にしうるごの)古墳の石蓋土壙墓と小型箱式石棺の実測。10月29日から11月9日まで、楢崎古墳（前方後円墳一県指定史跡）の平板測量を実施した。発掘調査は女夫塚古墳（女塚）を11月16日から12月25日の間、ヤンボシ塚古墳を昭和60年2月12日から3月8日まで実施した。

その結果、女塚古墳は宇土半島基部12番目の前方後円墳の可能性が出て来た。またヤンボシ塚古墳は、肥後型横穴式石室の石障に円文とゴンドラ型の舟の線刻を2箇所に描く装飾を発見するなど、宇土半島基部の古墳文化の解明に重要な資料を得ることができた。これもひとえに調査に協力された方々の賜物だと深く感謝の意を表します。また、これらの古墳は、地権者の理解により、すべて破壊されることなく現状で保存されている。　（木下）

2．調査の組織（女夫塚・楢崎古墳関係）

調査主体	宇土市教育委員会
	教　育　長　船田　至
調査総括	社会教育課長　本郷裕幸
〃	文化振興係長　一　宗雄
調査庶務	参　　事　中野照子
調査担当	主　　事　高木恭二
〃	主　　事　木下洋介
調査補助	古城史雄・松尾正義・川添幸子・広瀬恵子・河北　毅
	浦田信智・石村洋子・竹下真由美
調査協力	志垣　力・志垣英治・白川哲男・織田健一郎
	中重スポーツ建設㈱・ひのくにランド
指導助言	安原啓示（奈良国立文化財研究所）

II　位置と環境

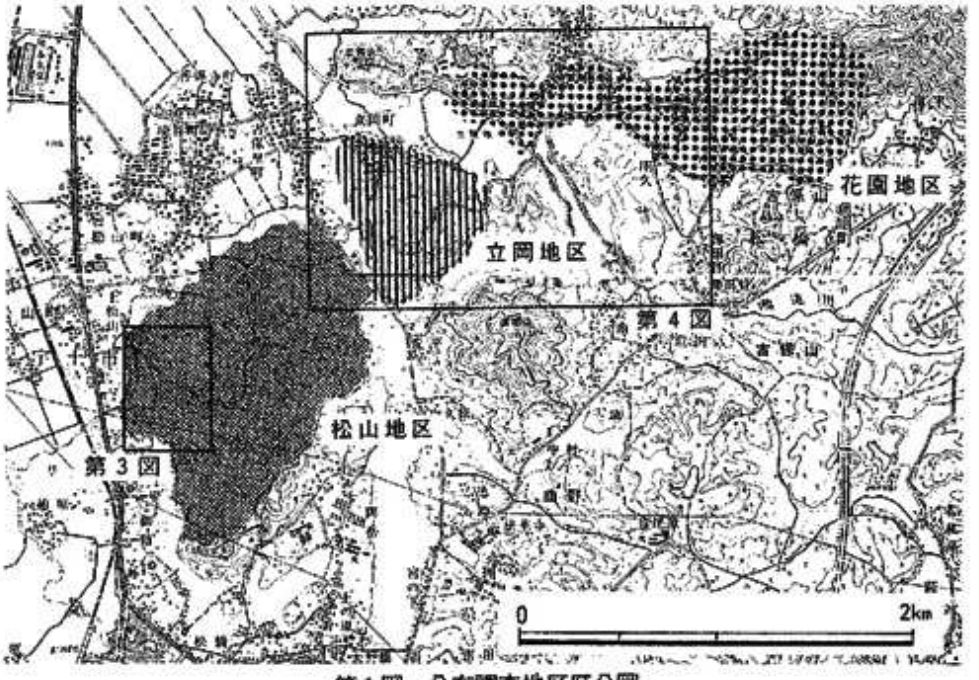
九州のほぼ中央部を西方に突出する宇土半島は、有明海を二分するかのように位置しており、その先端部から西南方に天草の島々が点在する。

宇土半島の主峰をなす大岳（標高478m）は旧火山系に属し、宇土半島にはこの山の溶岩（大岳溶岩）や火山灰風化土が厚く覆っている。半島の北と南には、海にむかって延びる多数の派生丘陵があり、そこには数基ずつの石棺や古墳が存在しており、宇土半島全体では100基にも及ぶ（第１図）。

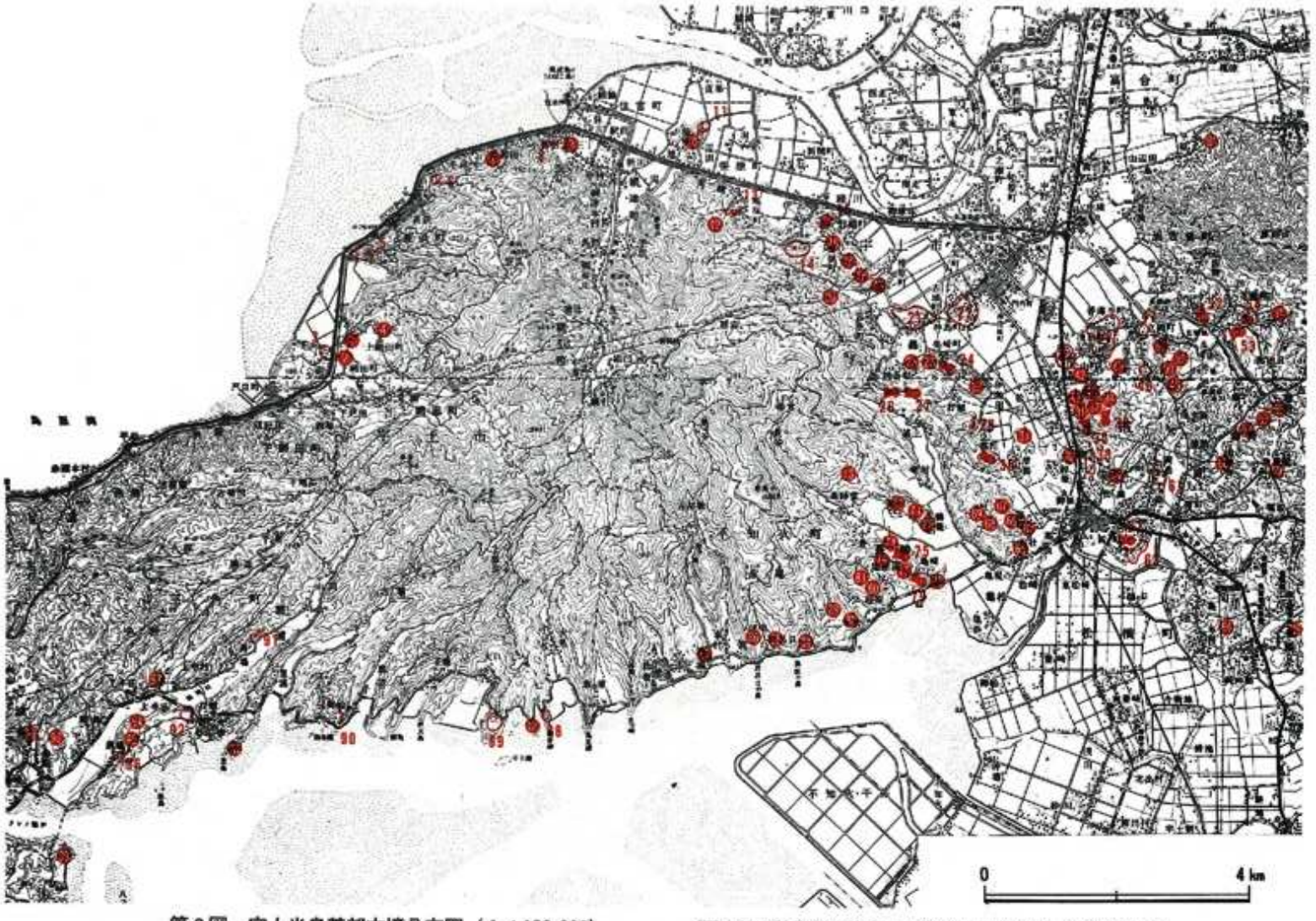
なかでもこの半島の東端にあたる付近には前方後円墳を多く含む古墳集中地帯があり、宇土半島基部古墳群の名で呼ばれる。その付近には北の熊本平野と南の八代平野につながる小沖積平野が広がっており、この平野をはさんで対峙するかのような形で、古墳が点在している。

東側と西側にわかれて位置する前方後円墳の総数は12基であり、今回の確認認査によって新たな前方後円墳の可能性がでてきた女塚古墳（本文IV章参照）を加えれば13基ということになって、県内でも最も有力な前方後円墳地帯ということになる。東側に位置するものとしては、宇土市の向野田古墳、御手水古墳、楢崎古墳、女塚古墳（？）、松橋町の男塚古墳、大塚古墳などの５基＋１基（？）であり、西側には、宇土市の天神山古墳、スリバチ山古墳、追ノ上古墳、城ノ越古墳、不知火町の仁王塚古墳、国越古墳、弁天山古墳の７基がある。　　（高木）

III　分布調査



第１図　分布調査地区区分図



第2図　宇土半島基部古墳分布図（1：100,000）　〔国土地理院発行の熊本・八代（1：50,000）を縮小使用〕

第1表　宇土半島基部古墳群一覧表

No	遺　跡　名	概　　要	文献	No	遺　跡　名	概　　要	文献
1	城2号墳	竪穴系横口式石室	①	31	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	⑲
2	城1号墳	横穴式石室	②	32	柏原古墳	円墳	⑲
3	マブシ古墳群	箱式石棺	③	33	御領東原古墳群	横穴式石室3基	⑲
4	ヤンボシ塚古墳	円墳・横穴式石室（装飾）	④	34	宇賀岳古墳	横穴式石室（装飾）	⑳
5	小松古墳群		⑤	35	向野田古墳	前方後円墳・竪穴式石室（埴輪）	㉑
6	長浜箱式石棺群			36	向野田石蓋土壙	石蓋土壙	㉑
7	小池平古墳	横穴式石室		37	御手水2号墳	円墳	
8	小部田横穴群	12基	⑥	38	御手水古墳	前方後円墳	
9	御殿山古墳	横穴式石室		39	南山内箱式石棺群	3基	㉒
10	梅崎古墳	横穴式石室（装飾）	⑦	40	南山内古墳	円墳	
11	梅崎箱式石棺群			41	チャン山(茶臼山)古墳	円墳・竪穴式石室	㉓
12	城塚古墳	横穴式石室（装飾）		42	柄鹿古墳	横穴式石室	
13	尾ノ上横穴群	14基	⑧	43	畑中遺跡	包蔵地	
14	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	⑨	44	境目遺跡	包蔵地	㉔
15	天神山古墳	前方後円墳	⑩	45	上松山石棺	箱式石棺	
16	経塚古墳	横穴式石室		46	神ノ山古墳群	円墳3基・家形石棺	㉕
17	東畑古墳	横穴式石室（装飾）	⑪	47	古保里石棺群	箱式石棺5基	㉖
18	金獄山古墳	横穴式石室		48	二枝古墳	円墳	
19	椿原石蓋土壙	石蓋土壙	⑫	49	西潤野古墳	石蓋土壙（家形）	㉗
20	仮又古墳	横穴式石室（装飾）	⑬	50	潤野古墳	円墳・家形石棺	㉘
21	西岡台遺跡	V字溝・箱式石棺	⑭	51	晩免古墳	円墳・家形石棺	㉘
22	宇土城遺跡	包蔵地		52	櫛崎古墳	前方後円墳・家形石棺他	㉙
23	猫城古墳	円墳		53	女夫塚古墳（男塚）	前方後円墳	㉚
24	城ノ越古墳	前方後円墳	⑮	54	女夫塚古墳（女塚）	前方後円墳？	本書
25	神合古墳	円墳（埴輪）		55	三日鬼の窟古墳	横穴式石室	
26	スリバチ山古墳	前方後円墳（埴輪）	⑯	56	池尾古墳		㉛
27	迫ノ上古墳	前方後円墳・竪穴式石室	⑰	57	畑中古墳		
28	久保古墳	円墳		58	琵琶田窯跡	須恵器窯跡	㉛
29	大平横穴群	2基	⑱	59	当尾小学校東窯跡	須恵器窯跡	㉜
30	仁王塚古墳	前方後円墳	⑲	60	ガローバル古墳	円墳	

No.	遺跡名	概要	文献	No.	遺跡名	概要	文献
61	上ノ原遺跡	包蔵地		91	城山横穴群	2基	
62	松橋大塚古墳	前方後円墳（埴輪）	㉙	92	打越中原遺跡		
63	前田遺跡	朝顔形埴輪	㉝	93	上木庄古墳1・2号墳		
64	狐塚古墳		㉛	94	竹和田古墳		
65	十五社石棺群	箱式石棺3基		95	西木の浦古墳群	10基	
66	大迫2号墳	横穴式石室	⑲	96	西木の浦横穴群	4基	
67	大迫1号墳	横穴式石室	⑲	97	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	
68	栗崎2号墳	横穴式石室	⑲	98	金桁古墳	箱式石棺	㊷
69	栗崎1号墳	横穴式石室（装飾）	㉞	99	鬼塚古墳（田井浦）		㊶
70	鴨籠2号墳	横穴式石室（埴輪）	⑲	100	児島崎古墳	横穴式石室	
71	鴨籠古墳	円墳・家形石棺（直弧文）	㉟	101	大串古墳	横穴式石室	
72	朱斗窯跡	須恵器窯跡	㊱	102	塚原平古墳	円墳・埴輪	
73	元米の山窯跡	須恵器窯跡	㉜	103	夢福古墳	横穴式石室	
74	八久保古墳	円墳・箱式石棺	⑲	104	神ノ上古墳	円墳・横穴式石室	
75	国越古墳	前方後円墳・横穴式石室（埴輪）	㊳				
76	道免古墳	円墳（埴輪）	⑲				
77	東塩屋浦古墳	箱式石棺	⑲				
78	弁天山石棺群	箱式石棺2基	⑲				
79	弁天山古墳	前方後円墳・竪穴式石室（埴輪）	㊴				
80	塩屋浦鬼の岩屋2号墳						
81	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室					
82	桂原2号墳	横穴式石室					
83	桂原古墳	円墳・横穴式石室（装飾）	㊵				
84	黒田製塩遺跡	製塩炉	㊻				
85	永尾於呂口古墳	箱式石棺	⑬				
86	甕塚古墳	箱式石棺	⑲				
87	河添の鬼の岩屋古墳	円墳・横穴式石室	⑲				
88	大見観音岬古墳	箱式石棺	⑲				
89	要古墳群	箱式石棺5基	㊶				
90	御船古墳群	横穴	㊶				

〈文　献〉

① 三島　格・他『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集　1981　宇土。

② 富樫卯三郎「網田古墳群」『宇土市の文化財第3集』P11　1977　宇土。

③ 富樫・卯野木益二「宇土市下網田町マブシ出土の石棺」『宇土半島・自然と文化』P107～118　1975　宇土。

④ 大田幸博「宇土周辺の中世城跡について」『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集　1977　宇土。

⑤ 富樫「小松古墳」『宇土市の文化財第3集』P10　1977　宇土。

⑥ 富樫「小部田横穴古墳群」『宇土市の文化財第1集』P11　1972　宇土。

⑦ 富樫「梅咲山古墳発見線刻の舟」『考古学ジャーナル20号』1969　東京。

⑧ 富樫「城塚尾上横穴古墳群」『宇土市の文化財第3集』P14　1977　宇土。

⑨ 富樫「神ノ木山遺跡」『宇土市の文化財第3集』P13　1977　宇土。

⑩ 富樫「天神山古墳」『宇土市の文化財第3集』P10　1977　宇土。

⑪ 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」『宇土ところどころ』P26　1978　宇土。

⑫ 三島　格「宇土市緑川原における石蓋土壙の一例」『熊本史学15・16号』1959　熊本。

⑬ 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊　1919　京都。

⑭ 富樫・他『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集　1977　宇土。

⑮ 富樫「熊本県宇土市楽崎町城ノ越古墳出土の三角縁神獣鏡」『熊本史学33号』1970　熊本。

⑯ 富樫「擂鉢山古墳」『宇土市の文化財第3集』P6　1977　宇土。

⑰ 富樫「追ノ上古墳」『宇土市の文化財第3集』P6　1977　宇土。

⑱ 平山修一「大平横穴古墳」『宇土市の文化財第3集』P14　1977　宇土。

⑲ 坂本経堯「古墳時代」『不知火町史』1972　不知火。

⑳ 濱田・島田・梅原「肥後国下益城郡松橋町の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊　1919　京都。

㉑ 富樫・他『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集　1978　宇土。

㉒ 北條暎幸・平山・木下「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究創刊号』1980　宇土。

㉓ 富樫「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」『石人№106』1968　熊本。

㉔ 富樫『境目西原遺跡』宇土市教育委員会　1969　宇土。

㉕ 宇土高校社会部「神ノ山1号墳」『宇土高校社会部部報第2号』1968　宇土。

㉖ 富樫「古保里石棺群」『宇土市の文化財第3集』P4　1977　宇土。

㉗ 富樫「宇土市大字立岡西潤野古墳」『ともしび第5号』1960　宇土。

㉘ 濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊　1919　京都。

㉙ 梅原・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊　1925　熊本。

㉚ 三島「肥後における古墳研究―戦後の成果と問題点―」『古代文化第17巻第3号』1966　京都。

㉛ 林田憲義「記 念 物」『松橋町史』1979　松橋。

㉜ 宇土高校社会部『古城』宇土高校社会部部報第8号　1978　宇土。

㉝ 佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」『法文論叢第26号』1970　熊本。

㉞ 三島「熊本県宇土郡塚原古墳群」『日本考古学年報14』1966　東京。

㉟ 濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村古墳」『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊　1917　京都。

㊱ 坂本「古代の生産」『不知火町史』1972　不知火。

㊲ 宇土高校社会部『宇土高校社会部部報第1号』1967　宇土。

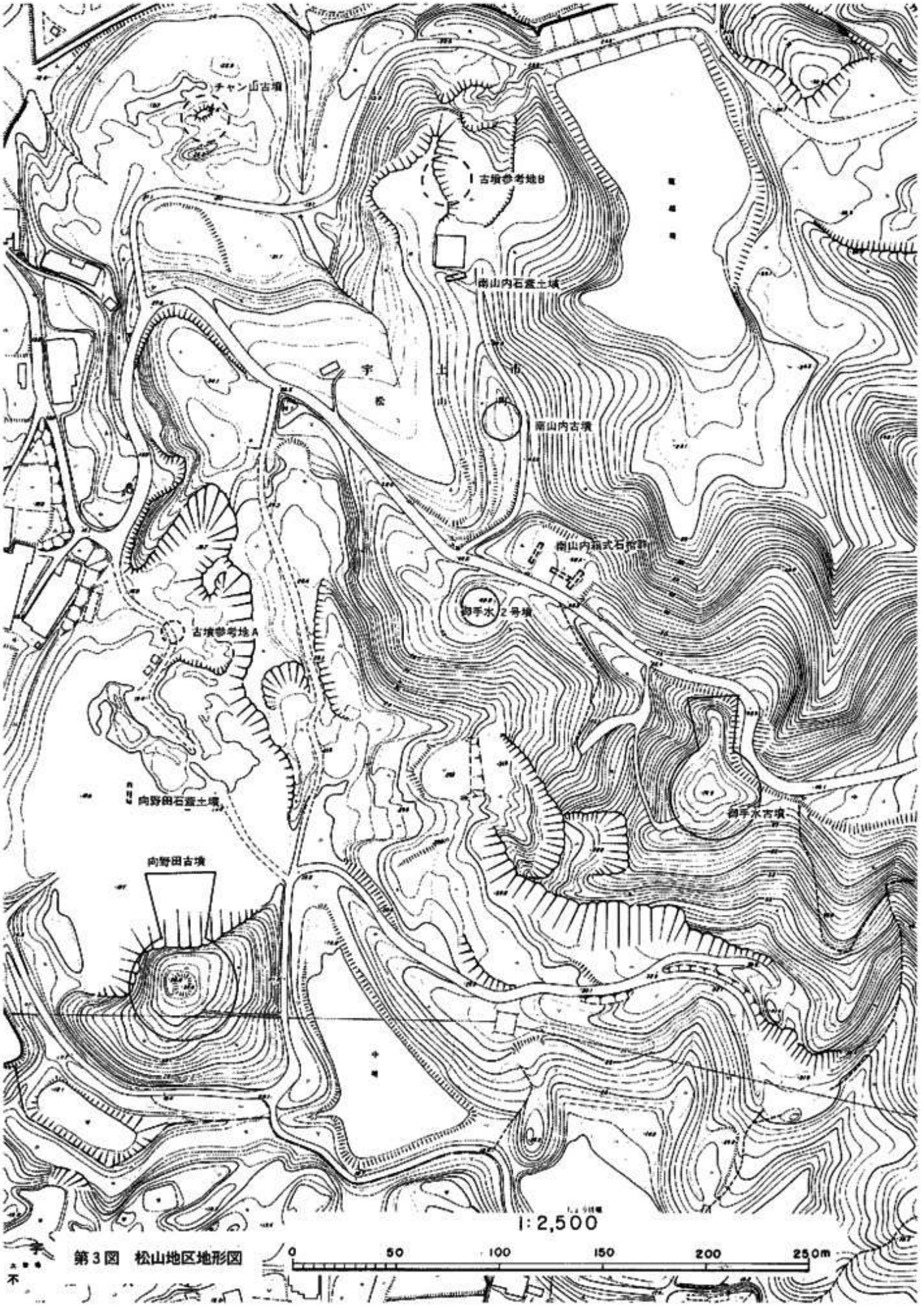
㊳ 乙益重隆「不知火町国越古墳」『昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報』1967　熊本。

㊴ 富樫「弁天山古墳調査概報―新発見の肥後最古の竪穴式石室墳」『熊本史学第30号』1965　熊本。

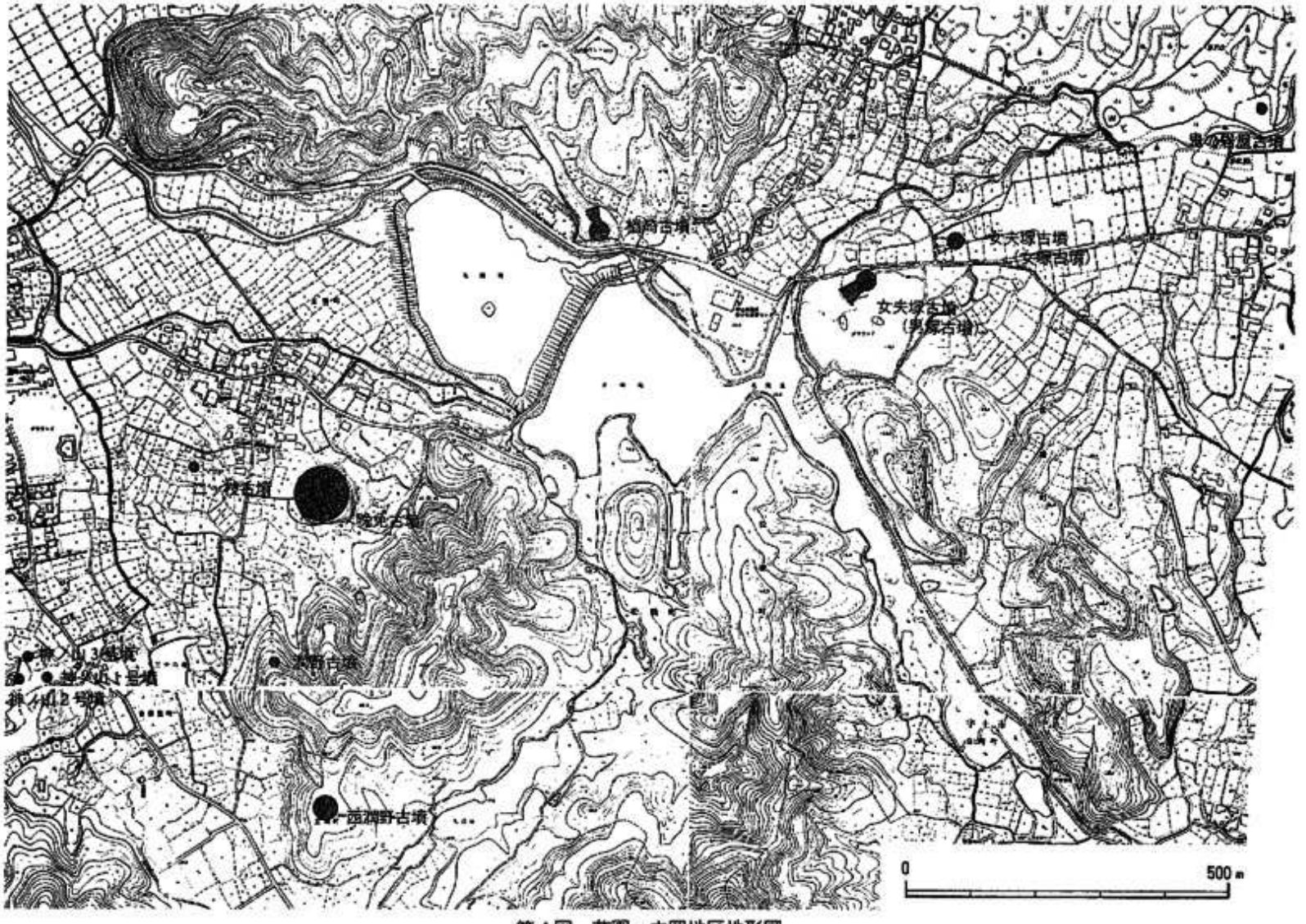
㊵ 三島「桂原古墳」『不知火町史』P72　1972　不知火。

㊶ 坂本「遺跡の環境・古墳文化」『平松箱式石棺群』三角町平松古墳調査報告　1957　三角。

㊷ 浦野謙次「肥後国宇土郡郡浦村大字中村小字前田、金桁古墳」『日本原人之研究』1943　東京。


チャン山古墳
古墳参考地B
南山内石蓋土壙
宇
松
上
市
南山内古墳
南山内箱式石棺群
御手水2号墳
古墳参考地A
向野田石蓋土壙
向野田古墳
御手水古墳
1:2,500
0
50
100
150
200
250m

第3図　松山地区地形図



第4図　花園・立岡地区地形図

第2表　分布調査地区古墳一覧表

(1) 松山地区

No.	古墳名	所在地	立地	種類	埋葬施設	出土遺物	備考	文献番号
1	向野田古墳	松山町字向野田	丘陵突端上	前方後円墳（全長86m）	竪穴式石室内に舟形石棺（被葬者は女性）	鏡3、車輪石1、刀4、剣4、刀子、玉類	朝顔形円筒埴輪・葺石。	20
2	向野田石蓋土壙	松山町字向野田	丘陵上	石蓋土壙	石蓋土壙1基	なし	直葬	20
3	古墳参考地A	松山町字向野田	丘陵上	円墳？	箱式石棺？	なし	安山岩板石	
4	御手水古墳	松山町字御手水	丘陵上	前方後円墳（全長約65m）	不明	なし		
5	御手水2号墳	松山町字御手水	丘陵上	円墳	不明	なし		
6	チャン山古墳	松山町字南山内	丘陵突端上	円墳？	竪穴式石室（粘土床）	鳥獣鏡1、直刀1	葺石。採土で消滅。茶臼山古墳	10
7	南山内箱式石棺群 南山内1号石棺 南山内2号石棺 南山内3号石棺	松山町字南山内	丘陵上	箱式石棺	（箱式石棺3基） 箱式石棺 箱式石棺 箱式石棺	 なし 刀子1、成人男性人骨1体分 刀子1	石棺直葬	26
8	南山内古墳	松山町字南山内	丘陵上	円墳	不明	なし		
9	南山内石蓋土壙	松山町字南山内	丘陵上	石蓋土壙	石蓋土壙1基	なし		
10	古墳参考地B	松山町字南山内	丘陵突端上	円墳？	不明	なし	マルヤマ	
11	桶底古墳	松山町字桶底	洪積台地上	円墳？	横穴式石室？	なし		
12	神ノ山古墳群 神ノ山1号墳 神ノ山2号墳 神ノ山3号墳	松山町字神ノ山	丘陵上	円墳3基	（家形石棺、横穴式石室） 家形石棺 横穴式石室（屍床配置のための仕切石あり） 舟形石棺？	 鉄剣1、直刀1、鉾1、刀子1、鉄鏃30以上 ガラス小玉、鉄鏃、須恵器	 棺身小口内壁に一対の刀掛状突起があり、そこに剣がのる。 採土により消滅	19
13	上松山箱式石棺	松山町字東原	洪積台地上		箱式石棺1基	鉾1		

(2) 花園地区

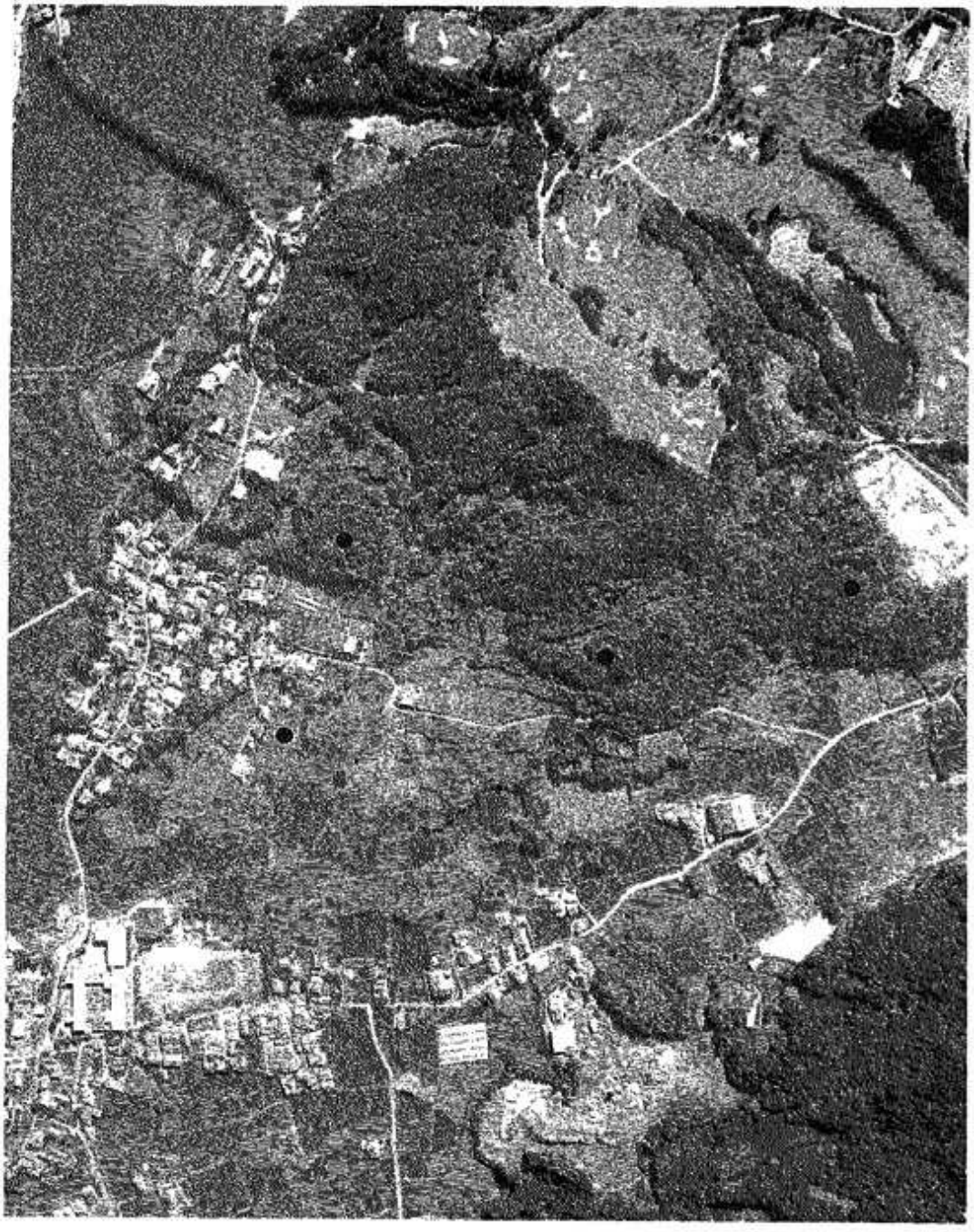
No.	古墳名	所在地	立地	種類	埋葬施設	出土遺物	備考	文献番号
1	楢崎古墳	花園町字楢崎	丘陵突端上	前方後円墳	(後円部)舟形石棺1基、家形石棺2基、石蓋土壙1基 (前方部)箱式石棺1基			4・5
	1号石棺				家形石棺	直刀2、鉄鏃1、人骨2		
	2号石棺				舟形石棺	人骨片	棺身一石刳抜。内壁長側辺に2個と3個の刀掛状突起あり。	
	3号石棺				家形石棺			
	4号棺				石蓋土壙			
	5号石棺				箱式石棺			
2	女夫塚古墳 (女塚古墳)	花園町字西原	洪積台地上	前方後円墳?	不明	須恵器		本書
3	鬼の岩屋古墳	花園町字大曽	丘陵上	円墳	横穴式石室	なし		32

(3) 立岡地区

No.	古墳名	所在地	立地	種類	埋葬施設	出土遺物	備考	文献番号
1	晩免古墳	立岡町字晩免	丘陵突端上	円墳	家形石棺1基	「刀剣ニ疑ハシキモノ数個」	棺蓋に6個の環状縄掛突起。棺身内壁の長側辺、小口にそれぞれ一対の刀掛状突起あり。円文等の装飾あり。	1・2・3
2	潤野古墳	立岡町字潤野	丘陵上	円墳	家形石棺1基	なし	棺蓋に4個の環状縄掛突起。棺身内壁の長側辺に一対の刀掛状突起あり。円文等の装飾あり。	1・2・3
3	西潤野古墳	立岡町字西潤野	丘陵上	円墳?	(家形石蓋土壙1基、箱式石棺1基)	なし		9
	1号棺				家形石蓋土壙			
	2号棺				小形箱式石棺			
4	二ッ枝古墳	立岡町字二ッ枝	洪積台地上	円墳?	不明	須恵器		

註　文献番号は第4表のNo.

図版 1　松山地区空中写真



図版 2　立岡地区空中写真

図版 3　花園地区空中写真

第3表　分布調査地区調査年譜

No.	古　墳　名	調査年月	文　　献　　(敬称略)
1	潤野古墳	1883	『古墳発顕記録』
2	晩免古墳	1886．5	小杉榲邨「肥後國に埋蔵するめづらしき石棺」帝國古蹟取調会会報第3号、1902年。
3	楢崎古墳	1921．10	梅原末治「肥後国楢崎の古墳に就て」歴史と地理第12巻第6号、1923年。
4	上松山箱式石棺	1958．2	富樫卯三郎調査
5	西潤野古墳	1959．6	富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」ともしび第5号、1960年。
6	チャン山古墳	1967．2	富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」石人No.106、1968年。
7	神ノ山1号墳	1967．6	富樫卯三郎「神ノ山古墳群」宇土市の文化財第3集、1967年。
8	楢崎古墳	1967．12	三島　格調査
9	神ノ山2号墳	1968．3	富樫卯三郎調査
10	向野田古墳	1968．3 1969．9	富樫卯三郎「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年。
11	南山内石棺	1978．7	平山修一・木下洋介・北條暉幸「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」宇土市史研究創刊号1980年。

第4表　分布調査地区文献一覧表

No.	発行年	著者名・論文名・書名・発行所名
1		『古墳発顕記録』
2	1902	小杉榲邨「肥後國に埋蔵するめづらしき石棺」『帝國古蹟取調會々報』第3号

No	発行年	著者名・論文名・書名・発行所名
3	1919	梅原末治「肥後國宇土郡花園村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第3冊、京都大学
4	1923	梅原末治「肥後國楢崎の古墳に就て」『歴史と地理』第12巻第6号
5	1925	梅原末治「宇土郡楢崎の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊、熊本県
6	1954	乙益重隆『肥後上代文化史』日本談義社
7	1957	三島　格「九州における突起ある横穴式石室墳」『熊本史学』第13号、熊本史学会
8	1957	花岡興輝「古墳発顕記録」『熊本史学』第13号、熊本史学会
9	1960	富樫卯三郎「宇土市大字立岡西潤野古墳」『ともしび』第5号、宇土高校社会部
10	1968	富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」『石人』第9巻第7号（通巻106号）、熊本史談会
11	1972	富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会
12	1972	富樫卯三郎「装飾古墳潤野古墳と晩免古墳」『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会
13	1972	富樫卯三郎「女夫塚古墳」『宇土市の文化財』第1集、宇土市教育委員会
14	1974	熊本県教育委員会『熊本県の装飾古墳白書』
15	1976	松本雅明編『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社
16	1977	富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、宇土市教育委員会
17	1977	富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市の文化財』第3集、宇土市教育委員会

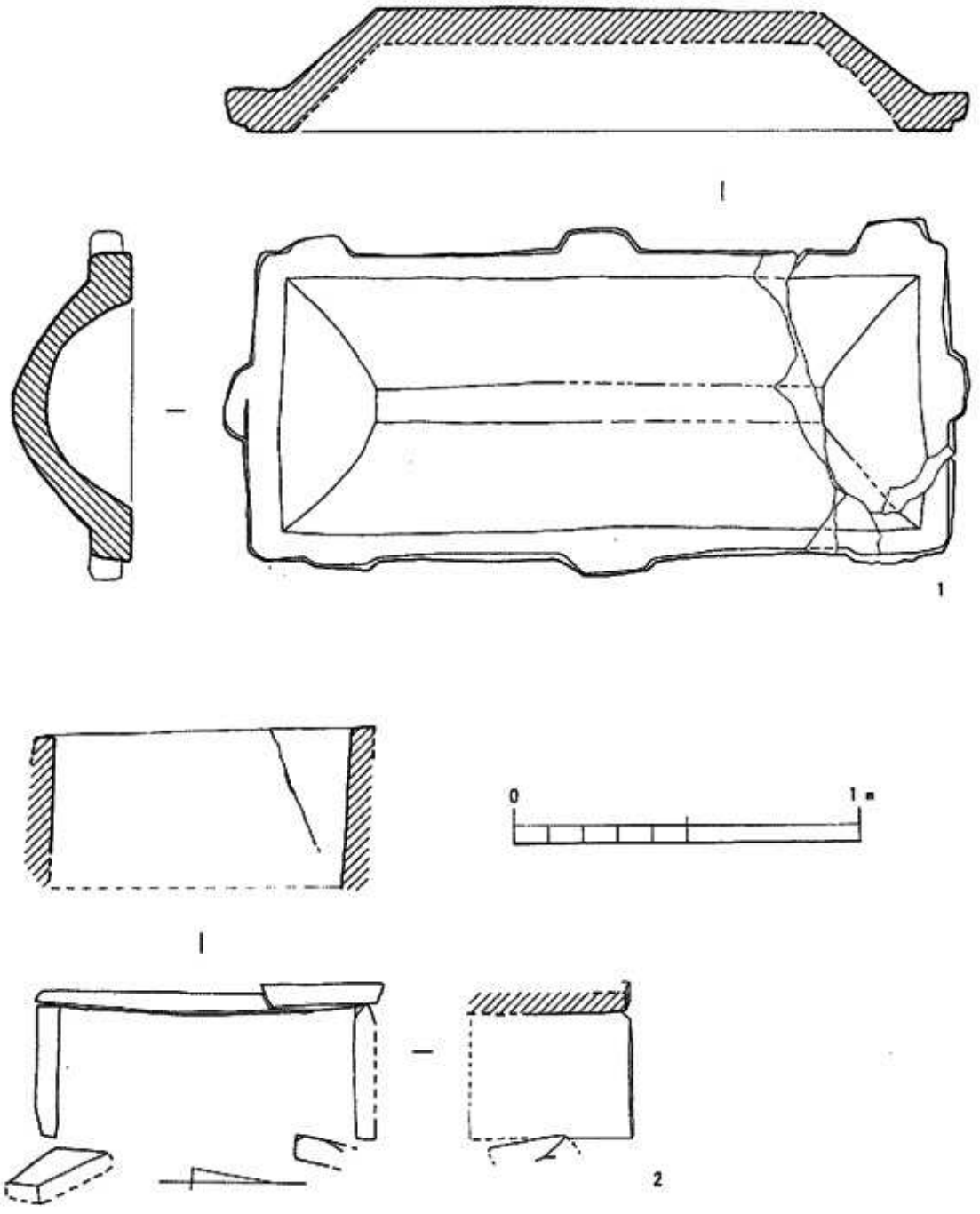
No	発行年	著者名・論文名・書名・発行所名
18	1977	富樫卯三郎「楢崎古墳」『宇土市の文化財』第3集、宇土市教育委員会
19	1977	富樫卯三郎「神ノ山古墳群」『宇土市の文化財』第3集、宇土市教育委員会
20	1978	富樫卯三郎「向野田古墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、宇土市教育委員会
21	1978	北條暉幸「向野田古墳の人骨について」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、宇土市教育委員会
22	1978	菊池泰二「向野田古墳の貝輪について」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、宇土市教育委員会
23	1978	堀　一夫「向野田古墳出土鏡について」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、宇土市教育委員会
24	1978	井上正康「向野田古墳出土車輪石・勾玉の石材について」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第2集、宇土市教育委員会
25	1979 1980	高木恭二「環状縄掛突起を有する石棺について―特にその石棺材の産地をめぐって―」『熊本史学』第53号・第54号、熊本史学会
26	1980	北條暉幸・平山修一・木下洋介「宇土市松山町南山内出土の箱式石棺」『宇土市史研究』創刊号、宇土市教育委員会
27	1981	佐藤伸二「宇土半島をめぐる古墳文化の諸問題―向野田古墳を中心として」『肥後考古学会誌』創刊号、肥後考古学会
28	1981	高木恭二「肥後南部の石棺資料(1)」『宇土市史研究』第2号、宇土市教育委員会
29	1981	布目順郎「向野田古墳出土の絹製品について」『宇土市史研究』第2号、宇土市教育委員会
30	1982	花岡興輝「古墳発顕記録(抄)」『宇土市史研究』第3号、宇土市教育委員会

No.	発行年	著者名・論文名・書名・発行所名
31	1983	「肥後古鏡粟英」『肥後考古』第3号、肥後考古学会
32	1984	高木恭二・木下洋介・古城史雄「如来寺跡一宇土半島基部古墳群分布調査報告(III)一」宇土市埋蔵文化財調査報告書第9集、宇土市教育委員会

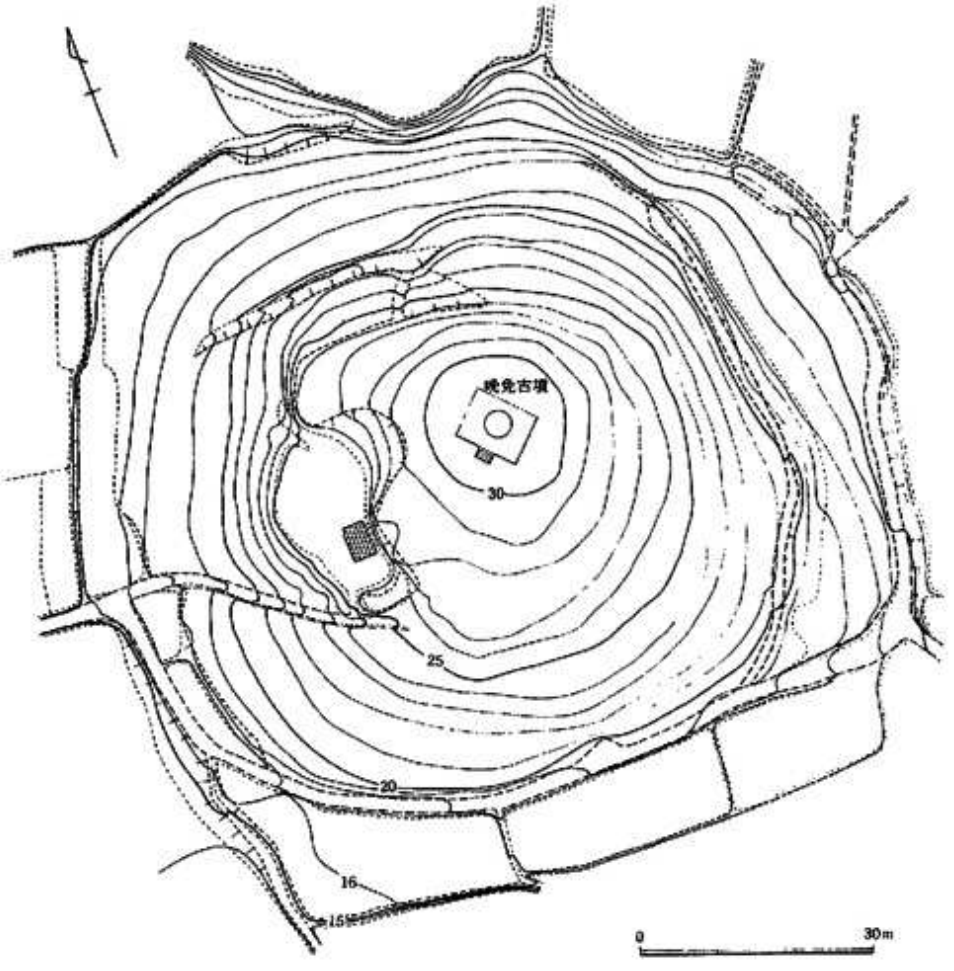
図版4　楢崎古墳現況1

図版5　楢崎古墳現況2

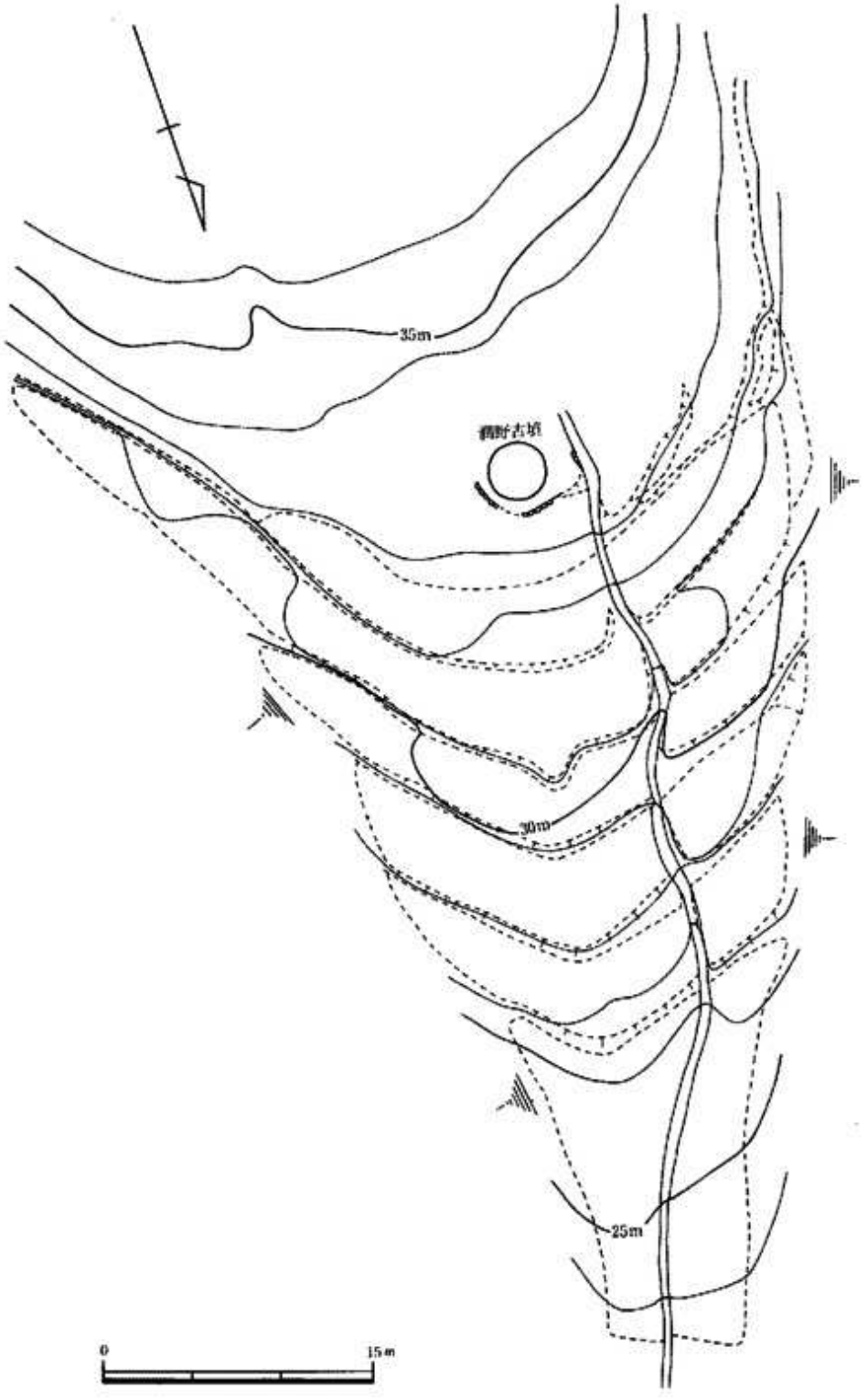
第5図　横崎古墳地形測量図（1／300）



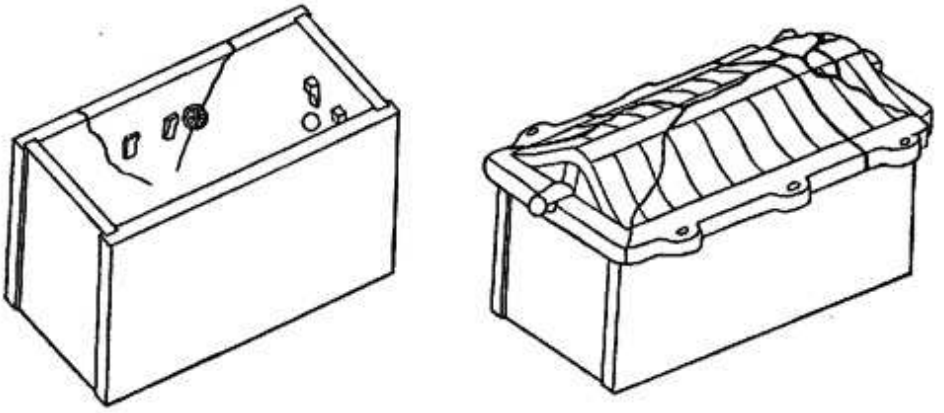
第6図　西潤野古墳石蓋土壙(1)，西潤野箱式石棺(2)実測図



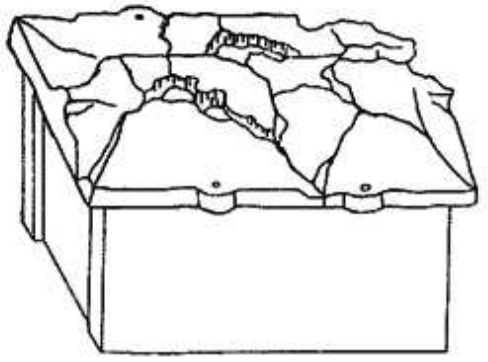
第７図　晩免古墳地形測量図

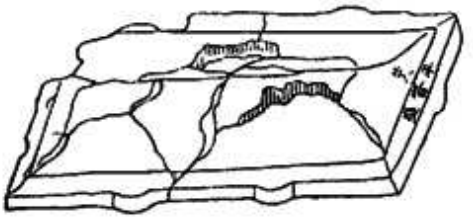


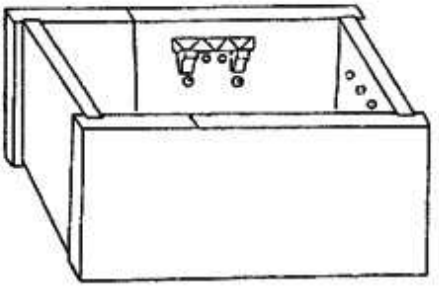
第8図　潤野古墳地形測量図



第９図　晩免古墳石棺見取図



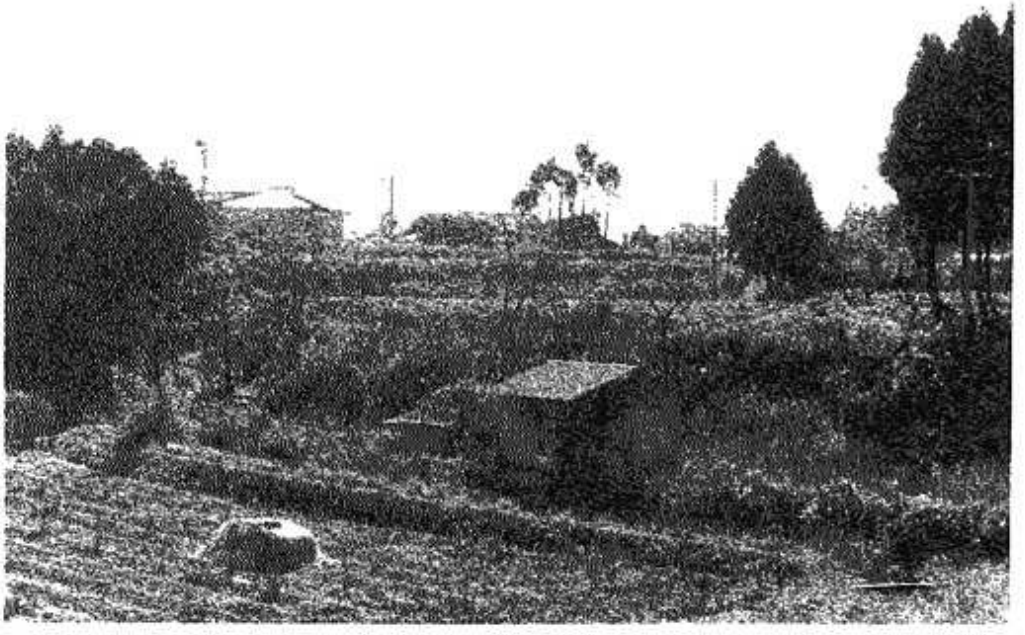




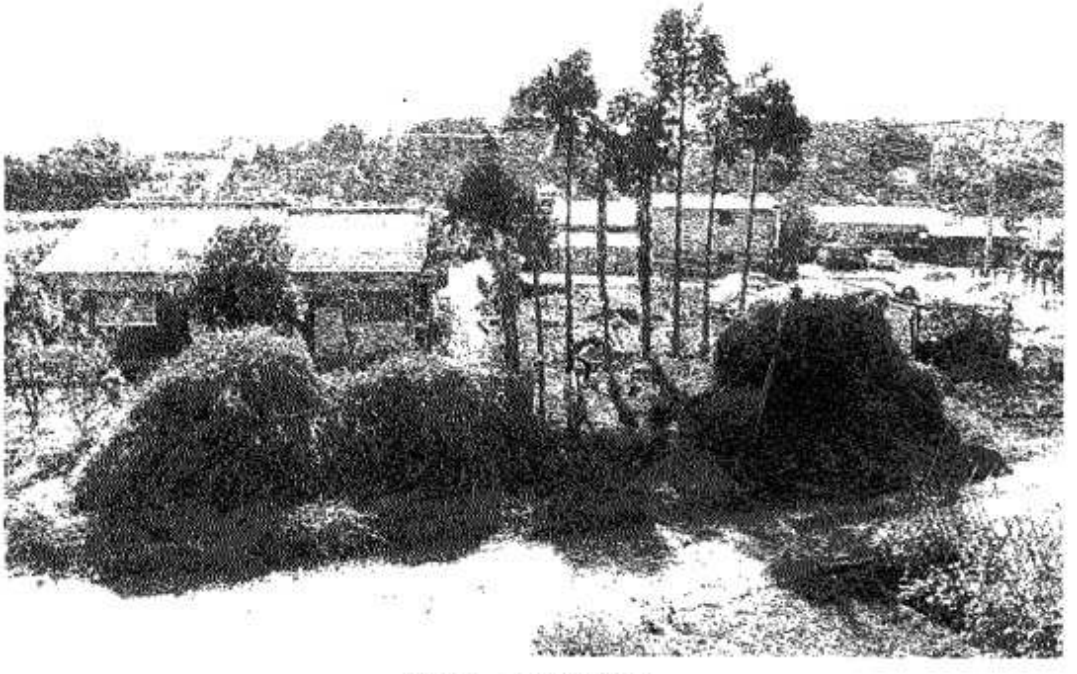
第10図　潤野古墳石棺見取図

Ⅳ　発掘調査

1．遺構



図版6　女塚古墳遠景



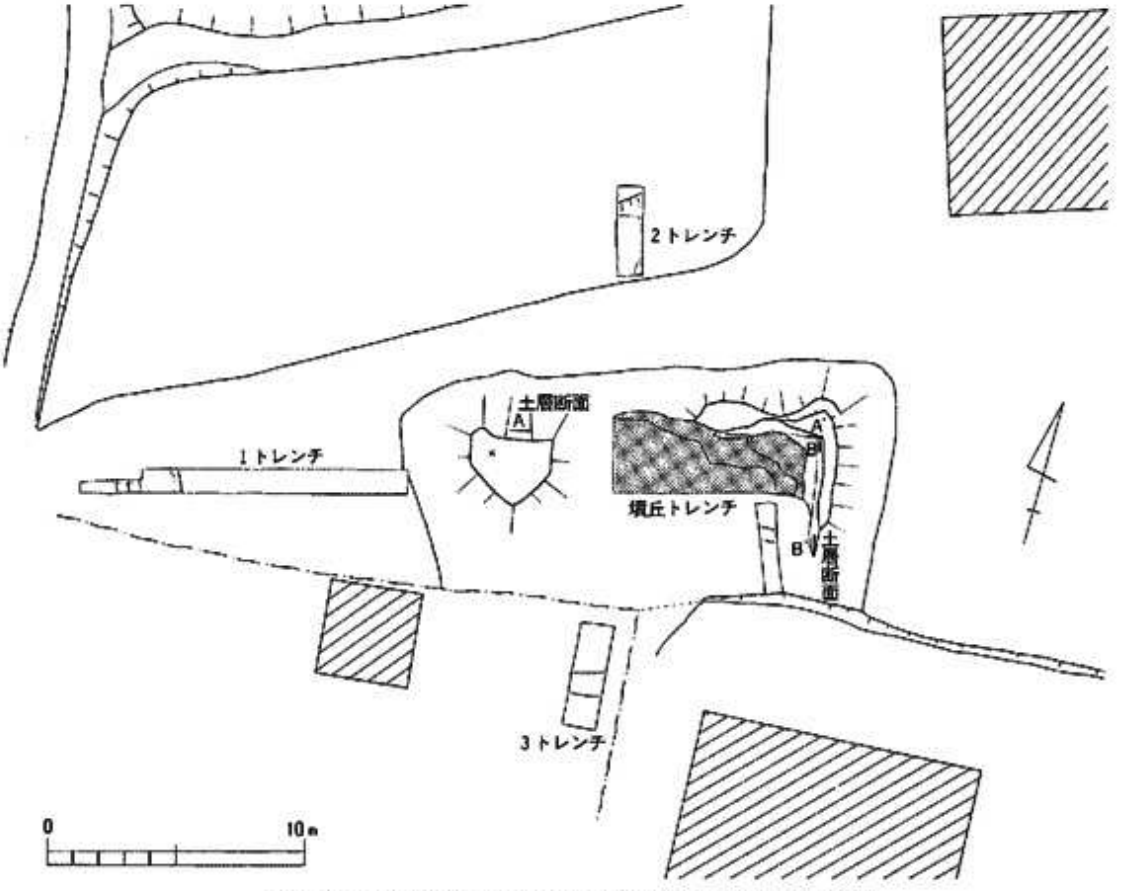
図版7　女塚古墳近景

墳丘　発掘前の状態は封土を田畑の客土用に採取されラクダのコブ状を呈していた。その大きさは長さ19m、幅10m、高さ2.8mを測る。調査は現状を変えないように長軸方向に土層観察のトレンチを設定した。旧地形の地表は、ほぼ水平で標高26.7～26.9mを測る。同じく層位は、Ⅰ層が黒色土で突帯文土器を含み、Ⅱ層が黄褐色土、Ⅲ層が赤褐色土の層序をなす。盛土は主にこれらの互層で、最高2m程残っている。

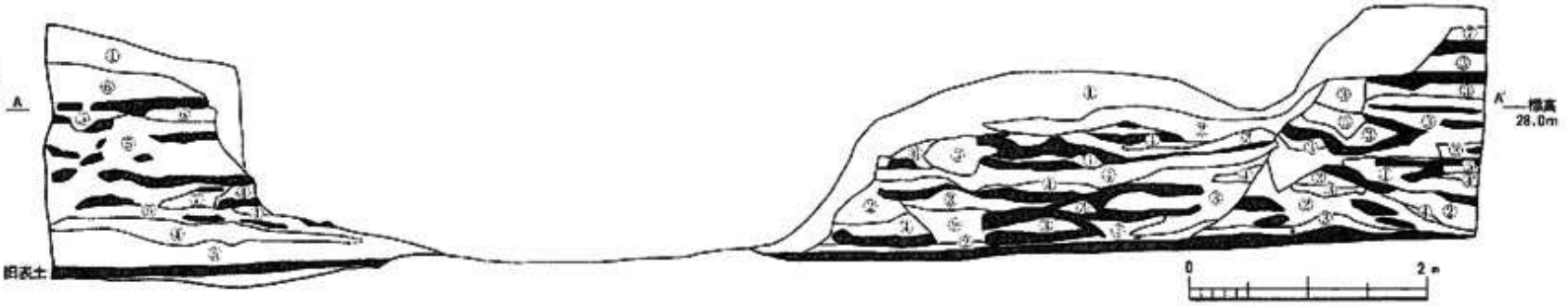
墳形　墳形を確認するためにT1～T3のトレンチによる確認を行なった。当初は円墳を想定していたが、各トレンチで確認した周溝らしき遺構の位置から平面形は円墳などのように単純なものではなく、前方後円墳の可能性が強い。特にT2トレンチはくびれ部、T1トレンチ西側が前方部端と思われる。しかし、確認箇所が少ないのでその規模等も不明のままであり、前方後円墳であると断定するには至っていない。

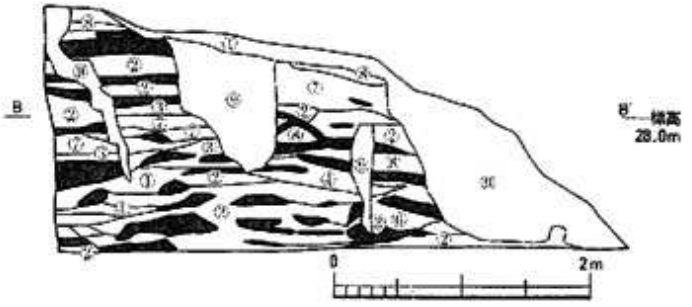
周溝　幅推定約3m、深さ46cm、既に周囲は削られているので墳丘内に残る旧地表と比較すれば深さ1.5～1.6mを測る。

内部施設　内部施設に使用された石材と思われる破砕された凝灰岩を数多く確認した。そのなかには面取りを行なったものもあるが、実態を掴むには至らなかった。

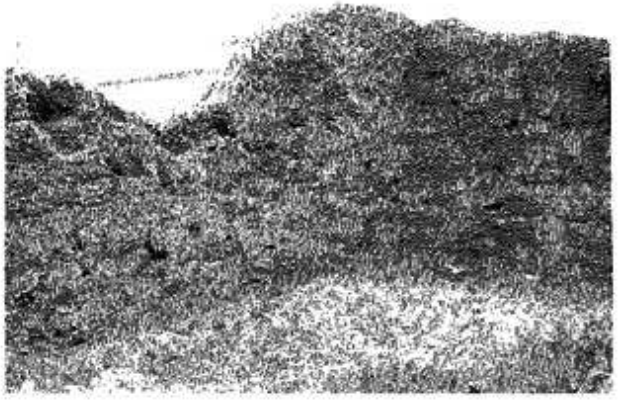


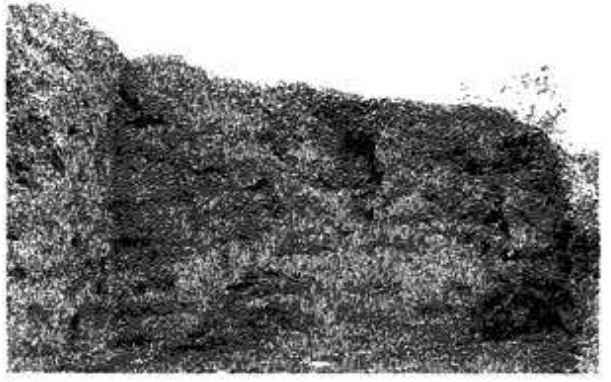
第11図　女塚古墳地形測量図・トレンチ配置図（1／300）



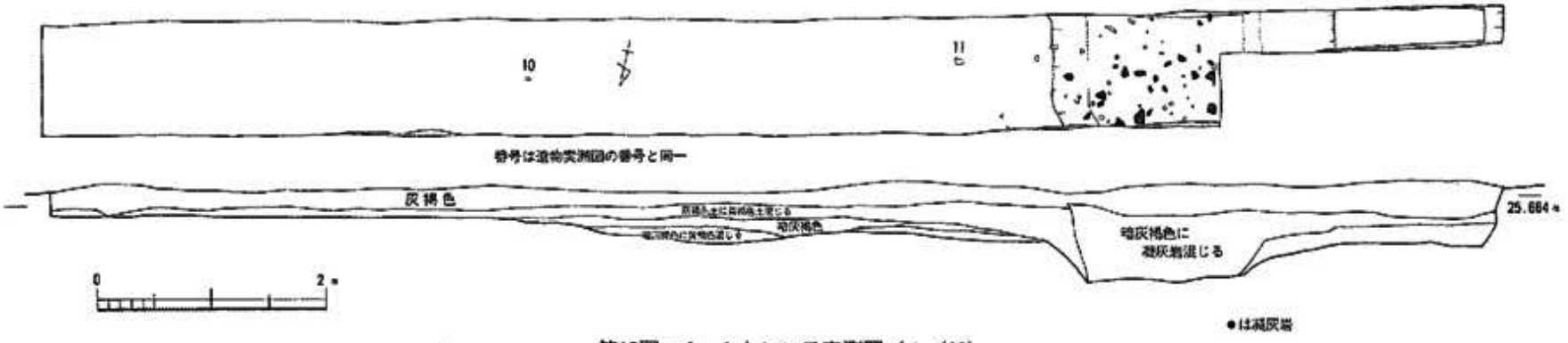


第12図　女塚古墳墳丘土層断面図

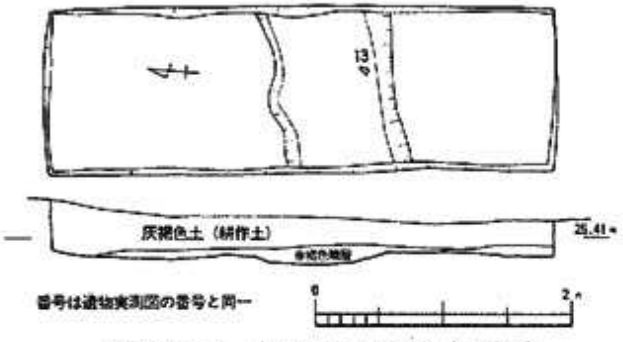




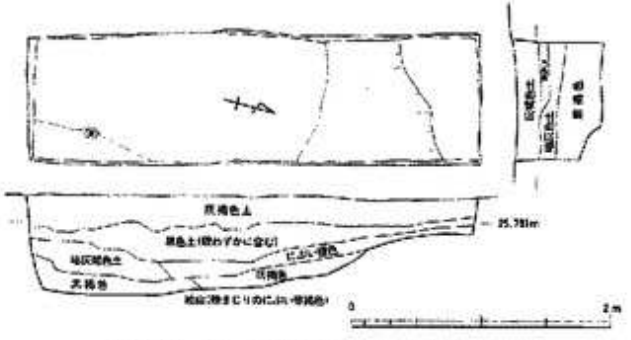
図版 8　女塚古墳土層写真



第13図－1　1トレンチ実測図（1／60）



第13図－3　3トレンチ実測図（1／60）



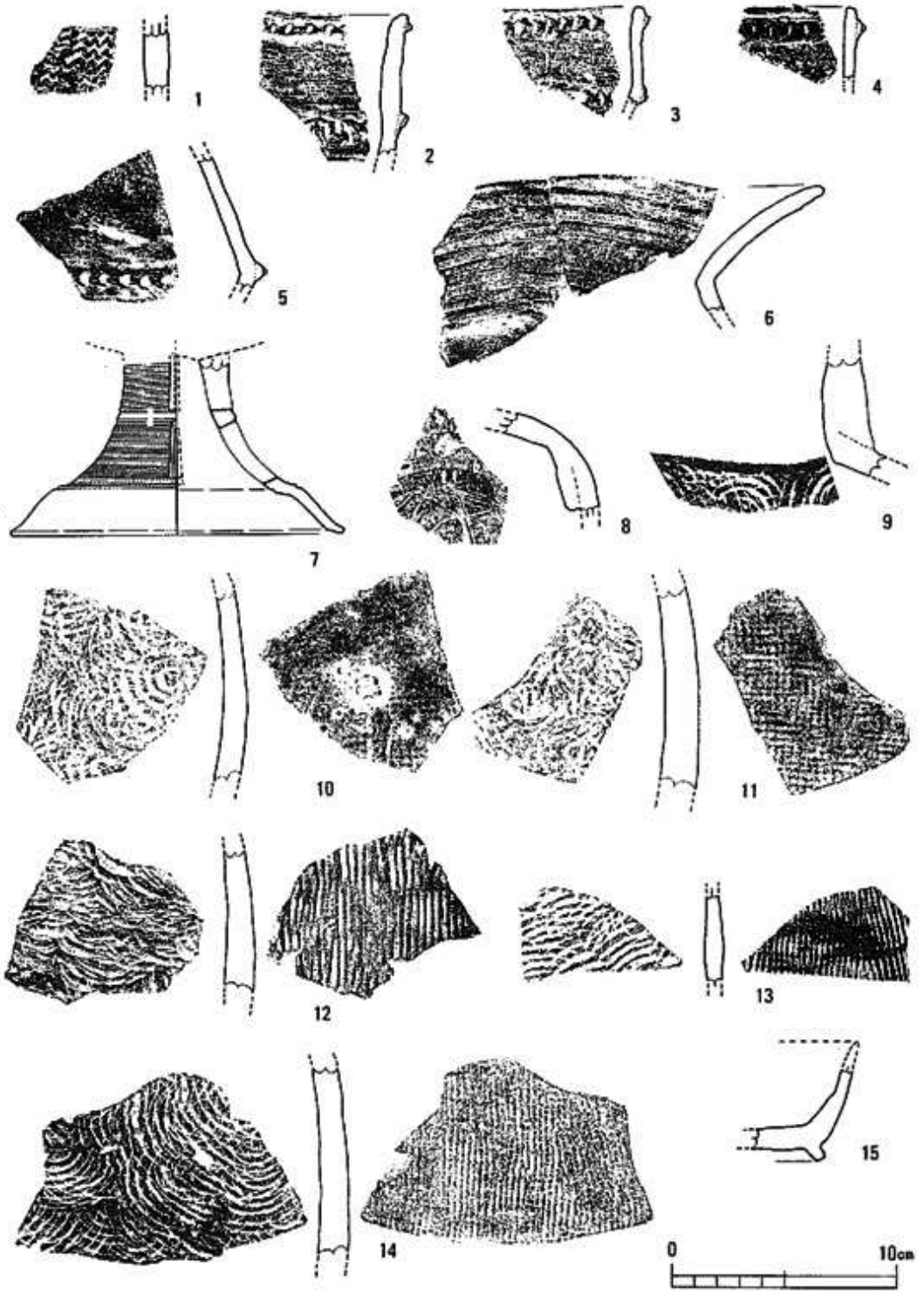
第13図－2　2トレンチ実測図（1／60）

2トレンチ

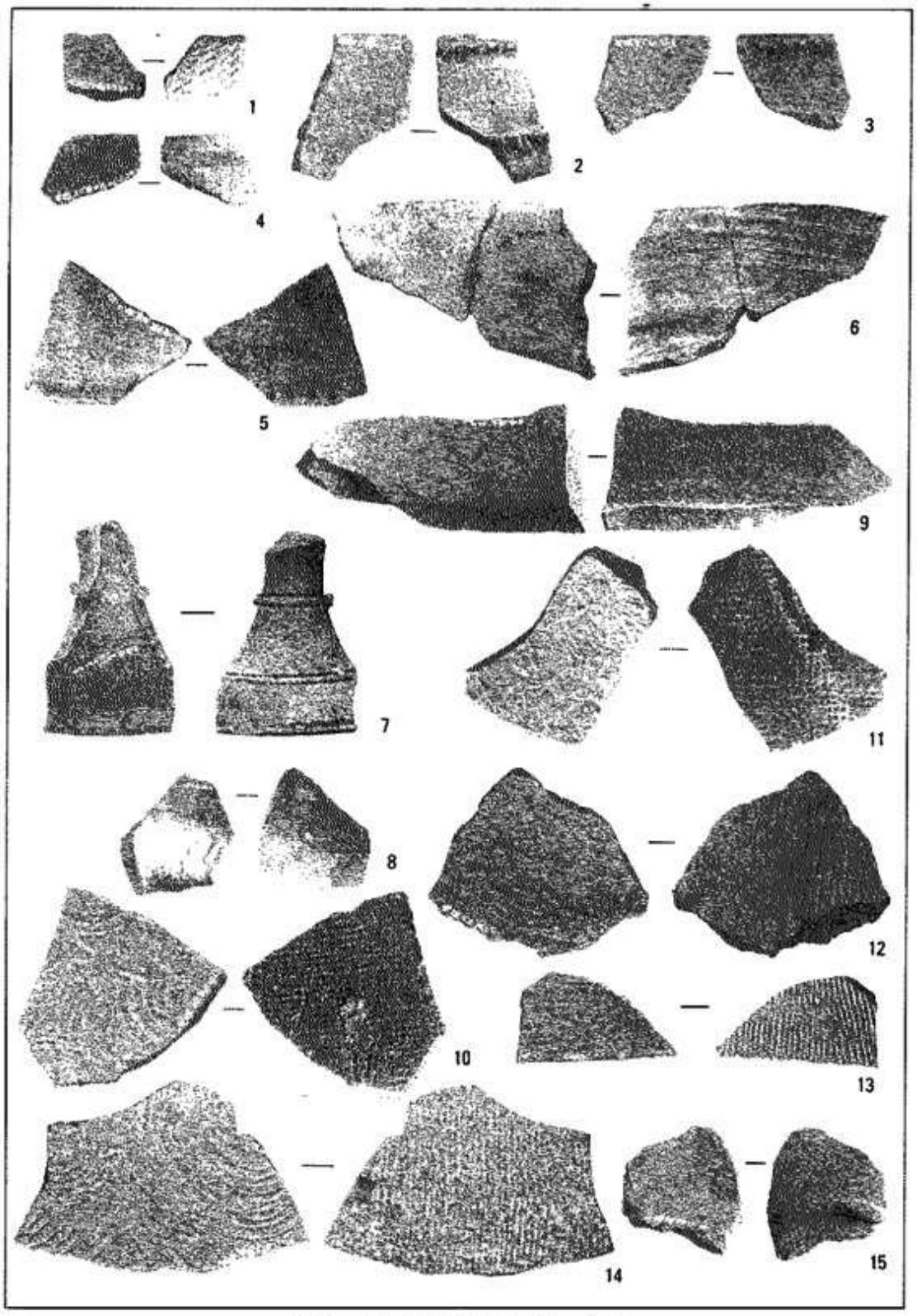
1トレンチ

図版9　女塚古墳トレンチ検出状況1

2．遺物



第14図　女塚古墳出土遺物実測図（1／3）

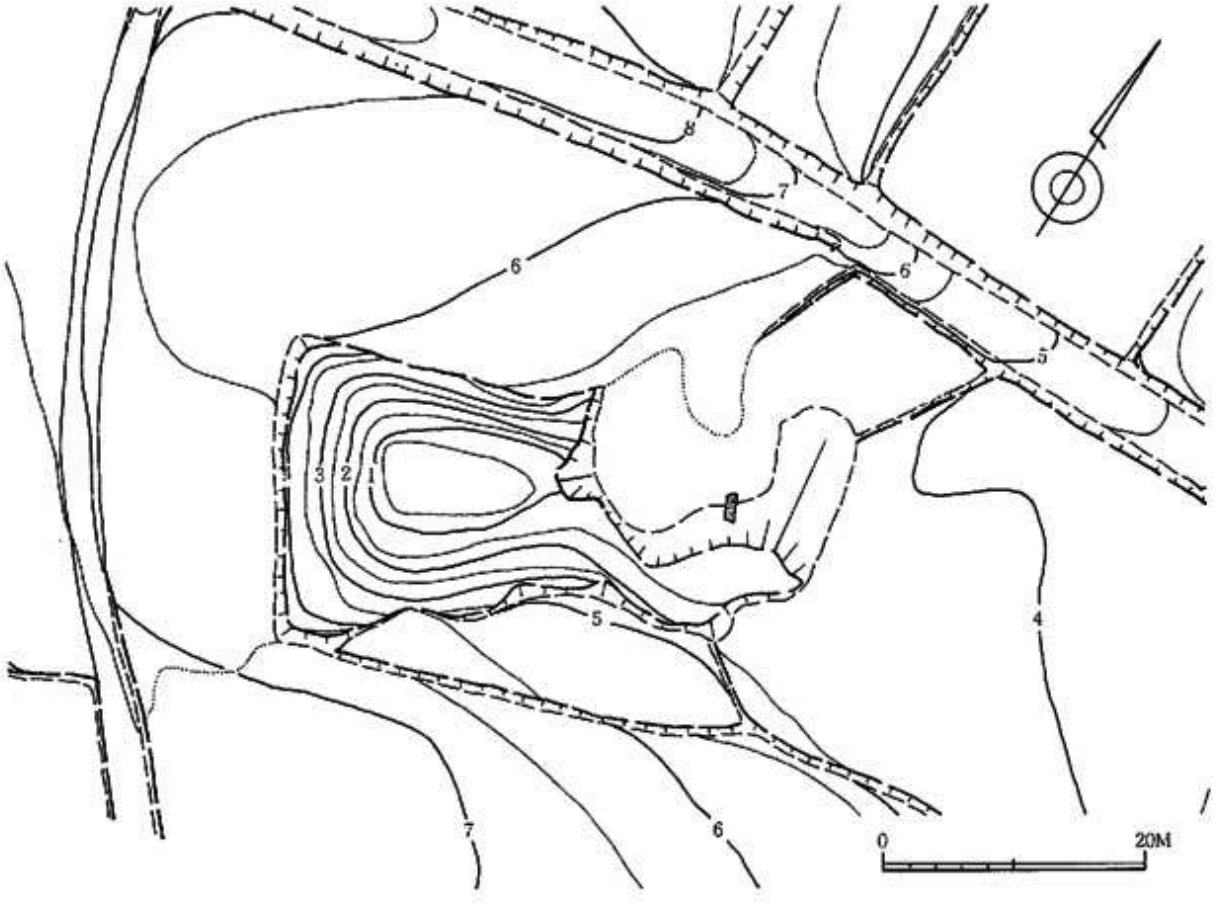


図版11　女塚古墳出土遺物（約1 / 3）

第5表　出土遺物観察表

No.	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土焼成色調	備　考
1	縄文土器 (押型文)	鉢		胴部片	外面 山形押型文	色調 外面は浅黄橙色、 内面は黒褐色 胎土 砂粒を含む 焼成 普通	2T、最下層
2	縄文土器	深鉢		口縁部、刻目突帯2条	外面 条痕 内面 ナデ	色調 橙色 胎土 やや粗い 焼成 良	封土中
3	縄文土器	浅鉢？		口縁部、刻目突帯2条 胴部突帯で屈曲	外面 条痕 内面 ヨコナデ	色調 外面は暗青灰色 内面はにぶい橙色 胎土 やや粗い 焼成 良	封土中
4	縄文土器	鉢		口縁部、刻目突帯	調整不明	色調 外面は浅黄橙色 内面は黒褐色 胎土 やや粗い 焼成 甘い	2T、最下層
5	縄文土器	深鉢		胴部、刻目突帯、突帯で屈曲	外面 条痕 内面 条痕	色調 外面は黒褐色 内面はにぶい橙色 胎土 粗 焼成 良	封土中
6	縄文土器	鉢		口縁部、「く」字状に大きく外反	外面 条痕 内面 ナデ	色調 外面は黒褐色 内面は灰白色 胎土 密 焼成 良	封土中
7	須恵器	高台付壺	底径 14.8 cm	脚部、上下2段にスカシ孔 (各4ヵ所)	外面 カキ目 内面 ヨコナデ	色調 外面は灰オリーブ色 内面は黄褐色 胎土 緻密 焼成 良	封土中

No.	種別	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	胎土焼成色調	備　考
8	須恵器	提瓶？		胴部	内面シボリ痕	色調 外面は緑黒色 内面は褐灰色 胎土 密 焼成 良	封土中
9	須恵器	大甕		頸部、部分的に釉がかかる	外面 ナデ 内面下部同心円叩き	色調 外面は青黒色 内面は黒褐色 胎土 緻密 焼成 良	封土中
10	須恵器	甕		胴部片、釉がかかる	外面 格子目叩き 内面 同心円叩き	色調 外面は灰オリーブ色 内面は暗青灰色 胎土 緻密 焼成 良	1T、1層下部 ヘラ描沈線あり
11	須恵器	甕		胴部片、自然釉がかかる	外面 格子目叩き 内面 同心円叩き	色調 外面は灰オリーブ色 内面は暗青灰色 胎土 緻密 焼成 良	1T、2層下部
12	須恵器	甕		胴部	外面 平行叩き 内面 青海波叩き	色調 灰色 胎土 密 焼成 良	封土中
13	須恵器	壺？		胴部片	外面 平行叩き 内面 青海波叩き	色調 灰色 胎土 緻密 焼成 良	3T、2層
14	須恵器	甕		胴部	外面 平行叩き 内面 青海波叩き	色調 外面はオリーブ青色 内面は灰色 胎土 緻密 焼成 良	封土中
15	須恵器	高台付坏		高台	内外面ともヨコナデ	色調 外面は灰黄褐色 内面は明褐灰色 胎土 密 焼成 良	封土中



第15図　男塚古墳地形測量図（1 ／600）

V　まとめ

今回の確認調査によって得られた調査の内容については、整理期間がうまくとれなかったことや、年度末になって緊急に実施することになった上網田町ヤンボシ塚古墳の調査（60年度報告予定）等の関係で、詳細を報告することはできなくなってしまったが、その概要は以下のように要約できる。

1．楢崎古墳地形測量

楢崎古墳の地形測量図については、これまで昭和42年に宇土高校社会部によって作成された300分の1地形測量図[注1]が存するのみで、コンタも1m間隔（一部50cm）と大雑把であり、範囲もかなり限定されていた。しかも、墳丘の周辺部が、昭和50年に建設された「ひのくにランド」の駐車場となったため、大幅な地形変化がおこっているなどの理由で、改めて詳細なる地形測量図を作成することにした。今回作成した測量図によって楢崎古墳の計測値を求めれば次のようになるが、この数値は発掘を実施すれば若干の変更があることはいうまでもない。

全　長	46m＋α
後円部直径	35m
後円部高さ	5.7m
前方部幅	21.5m ?
前方部高さ	4m
くびれ部幅	21.5m

楢崎古墳の調査は大正10年に行なわれ、調査後既に64年の経過をみている。調査後、古墳はそのまま残されることになり、後円部の石棺には覆屋がかけられ保存されてきたのであるが、長年月の経過と共に覆屋は朽ち果て石棺は雨ざらしの状態となっている。

古墳の内容を知るには当時の報告[注2][注3]に頼るしかなく、大半はそれに依存しているというのが実情である。しかし報告ではこの古墳は径約27mの円墳となっており、古墳の明確な規模は明らかでない。しかも2号石棺は棺身底が丸味をもった造りでそれを家形石棺とよぶにはふさわしくなく、舟形石棺と呼ぶべきものであることなど、その後に明らかになった知見[注4]もいくつかある。特にこの2点については、今後、発掘を実施するなどの方法で詳細を確認する必要があるし、埋葬施設の保存策を早急に講じる必要がある。

2．女塚古墳墳丘確認調査

女塚古墳（宇土市花園町字西原）は、西北西に100m離れて位置する男塚古墳と併せて女夫塚古墳の名で呼ばれている。しかし、男塚古墳は、行政的には下益城郡松橋町字古保山に属し、両者は分断された形になっている。男塚古墳は約46mの前方後円墳と推定され、一方の女塚古墳が径20m前後の円墳であろうと考えられてきた。惜しいことに、男塚古墳の後円部の大半と、女塚古墳の墳丘の中心部の大半は採土によって大きくえぐり取られ旧状を大きく損なっている。

昨年行なった分布調査によって、女塚古墳の墳丘から須恵器片を採取し、直径20m・高さ3m以上の円墳であろうとの推測するにいたり、報告[註5]でもそのように記したところである。ところが今年度は墳丘確認のためにトレンチを3ヵ所に設定したところ、この古墳に伴う周溝が確認され、円墳とするにはやや不都合なめぐり方をすることが明らかになった。即ち、第2トレンチ部分をくびれ部とし、第1トレンチを前方部端とすれば西に前方部を向け、主軸をほぼ東西にもった前方後円墳である可能性が出てきた。調査期間や調査対象地の関係で、それを確認するまでには至らなかったが、将来の課題としたい。

採土によって大きくえぐり取られた墳丘の中央部にもトレンチを設定したが、主体部の痕跡を示すようなものはなかった。しかし、第12図でみるように墳丘には明瞭な版築を認めることができる。

各トレンチから少数の須恵器片が出土しているが、明確に時期を物語るようなものは殆どなく、わずかに墳頂部より採取した台付壺の脚部と推定される一片（第14図7）が手がかりになろう。

この女塚古墳が前方後円墳に間違いないとなれば、男塚古墳との比較で、この宇土半島基部一帯、ひいては熊本県下における前方後円墳消滅の時期[註6]を考える上で極めて重要な意味をもつことになるのであるが、今後に課題を残すこととしたい。　　（高木・木下）

註

(1) 宇土高校社会部「樋崎古墳地形測量図」宇土高校社会部報第2号、1968年。

(2) 梅原末治「肥後國樋崎の古墳に就て」歴史と地理第12巻第6号、1923年。

(3) 梅原・下林「宇土郡樋崎の古墳」熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊、1925年。

(4) 高木恭二「肥後南部の石棺資料（1）」宇土市史研究第2号、1981年。

(5) 高木・木下・古城「如来寺跡」宇土市埋蔵文化財調査報告書第9集、1984年。

(6) 高木恭二「各地域における最後の前方後円墳（熊本県）」古代学研究第102号、1984年。

雜　　録

本圖に収むる所は未だ調査會議に上らざるものなり

肥後國に埋藏するめづらしき石棺

文學博士　小杉榲邨

今を距る十年の一トむかし、拙者は臨時全國寶物取調といふ事に從つて、明治二十五年の二月より五月中旬頃まで、鹿兒島、熊本兩縣へ出張した、其熊本に巡回しましたのは、四月五月に渉つたが、當時熊本縣知事は、松平正直君であつた、段々國郡取調べますには、いつも社寺掛の屬官内藤正由といふ人と同行した、一日内藤が云には、宇土郡立岡(タツワカ)村の晩免(バンメン)といふ所の小山上に、奇妙な石棺がある、縣廳でも一通りしらべたなれど、其口碑に傳ふる所と、現品は時代がちがひはせぬか、何にしても只の物でないとて、此頃問題中であります、そこで直接御取調ではなからうが、幸の事、貴官の御了簡は如何であるか、近傍へ御出の時、一寸御立寄にて御一閲を願ふとの事です、そこで拙者それは内藤氏の一已の心得か、或は知事君よりさやうの内話でもありしかと押かへしたが、無論この口上は、縣廳長官よりの御たのみでござる、といふから、然らば宜しい、拙者でわかるかわからぬか、受合は出來ないが、まづ一閲して見ませうといふておいた、そこで丁ど其近傍をしらべましたる一日、その立岡村晩免に立よつた、この場所は地方取調需にあるか如き所で、其傳來も今以てさやうにいつて居るとの事ながら、なるほど其實地を見まするに、四方に柵を結ひ回し、濫入をふせぎつゝ、其石棺にはざつと土をかけかけてある、これ自然に皇子とか皇族などの御古蹟ではあらぬか、其筋へも申立てあるからに、御しらべありやも難計との用意との事です。さて其土をかきのけて、其全體を見まするに、次に縮臨を出す外部圖の如きものですが、さて其ふたを大勢で取のけて内へも入て見まするに、今は何もなく土砂のみ入つてをります、これも縮臨内部圖の如きものですが、大和あたりにて見る丸ぼりと違ひ、四方よりさし合せてかたちをなせるものなるが、奇妙なるは押ぶたがあつたと見ゆる、其ふたうけの如きものを浮けぼりにほり出し、菊章の如きぼり出し紋がある、これは世間にいふ寶相花といふ方のものではない、實に菊章ともいふべきものでせう、又石質は眞いろの緻密の質ながら、最も軟弱にもろい方の質で、本國にはこの石質で造つたる寶塔形の石塔、諸方にある、就中古き物といふは、飽田郡蓮臺寺村の蓮臺寺に、再び置かるゝ、かの名高い檜垣の嫗が石塔と同質です、いかにも其體たらく、平家時代の安德天皇、及び清盛相國や、重盛内大臣ごろのものでは決してない、しかし内地の古傳を始め、このあたりの地理の如何もしらず、新舊の口碑万端しらぬ門外漢の身にして、何とも意見はたゝぬが、たゞ其公平の時代研究よりこれを見るに於ては、隨分古いものといふ事は明言が出來る。とはいふものゝ、石質は石質として、この菊章の如きものと、押ぶたうけのうけぼりの類は、前後今こゝ

で見るが眞に始てであるから、上古時代にもこの類ありや、猶歸京の後には、諸陵寮の諸氏にもはなし、又同臭の學友にも追〻しめすべき、よいおみやが出來たといひつゝ、その菊章らしきものを攫ちとり、又調書に滿月形とあるは、ヤハリ菊章らしいものともと同樣であつたが、其のもろい石質ゆゑに、紋はこぼれてたゞ圓形のおぼろげに遺つて居るに違いなし、と思ふまゝに、其の圓形も樣ち取て歸つた。其後諸陵寮についでありし時、この事を咄し、又一二の知友にも咄したが、いづれもそれは奇妙じやといふた事ながら、其後熊本縣の消息も聞かず、又學者社會の樣子もそれきりに、はや十年立ました。幸いに本會にこの事を持出し、一は古代にこの押ぶたあるが如き石棺の製造ありや、又かの菊章といふもの、寶相花とはきはやかに違ふものゝ類ありや、細工はいかにもこまかに見ゆるが、決して平家時代まではくだらぬものと思はれます。諸君宜く慈教を願ひます。

地方取調書の備考とて、附録にしましたる、潤野(ウルノ)の平資盛と彫刻しましたる石棺も、同石質にして、これも誰か古代人の棺でありませう。平資盛の三字彫刻は、近時にいたづらをなしたるものと見えて、字體今樣の楷書です、軟弱質の石ですから、コンナ事も隨分出來たと思ひます、しかし晩免の内部の彫刻、ふたうけのうけぼり及び菊章のやうなるものは、決していたづらしごととは見えませぬ。參攷にとて其資盛といふ石棺も見ましたから、こゝにこの一言を附し置きます。

内藤がしめしましたる地方取調書といふものを寫置ましたる左の如きものです、

肥後國宇土郡立岡村字晩免古墳取調書

一　石棺ハ立岡村(タツアカ)又タチガカトモ云フ　字晩免ノ一小山ニアリ山勢ハ圓錐體ノ尖端ヲ截去セシモノニ等シク周回平均ニ斜度ハ粗八寸勾配ニシテ山脚ノ周回凡ソ二町全山ノ面積凡一町歩

但官山ト稱スル所ハ僅ニ頂上一段歩許ニ止リ餘ハミナ民林又ハ耕地ニ屬ス

一　地質ハ岩層黄赤土ニシテ即チ黄壤ト稱スルモノナリ官山域内ニハ棺邊ニアル回リ一尺以上ノ松壹株ニシテ他ハ稚松灌木ノ點々生植スルノミ故ニ其形容ヲ以テ呼ブトキハ赤禿(ハゲ)山ト云モ可ナリ而シテ山ノ南半腹ニ觀音堂アリ老松四五株アリ堂ノ創立年月詳カナラズ或云元一小龕ニシテ山麓ニ安置セシモノ也然ルニ後世今ノ所ニ移シテ堂宇ヲ設ケタリト

一　石棺ニ接シテ之ヲ檢スルニ蓋石缺壞土砂流落棺中ノモノト混亂セリ

一　蓋石ハ元二個ノ石ヲ以テ成リシモノト認ム乃チ石質ノ稍異ナルト斧鑿ノ痕アルトニ由テ徵セリ

一　蓋石表面ニハ元ト種々ノ彫刻アリシモノヽ如クナレドモ露出年久シキト石質ノ堅實ナラザルトニ依テ漫漶シテ判明ナラズ

一　棺ノ内部北邊ニ刀掛ノ如キモノ一個ト滿月形二個又西邊ニ菊章ト刀掛ノ如キモノ一個共ニ浮彫リシアリ且四邊及ビ蓋石ノ裏面ニ朱砂斑點セリ

楢崎云この所に刀掛の如きとあるは本文に押ぶたうけとも見ますべきといふたこれです又

この朱砂とあるいかにも赤くしみつきて見えます

一　石棺ヲ距ル僅三四尺ノ所ニ松樹一株アリ其盤根露出セシ高サ四尺許以テ石棺ヲ埋藏セシ土砂ノ幾層ヲ剝落セシ一證トス又其松根ノ地ニ入ルモノ棺邊菊章ノアル缺隙ヨリ竄入セリ

一　朽骨土砂ト雜糅シ又間ニハ細片亂點セリ故ニ今ニシテハ整然タル斂置ノ原狀ヲ察スルニ由ナシ然レトモ土人ノ云所ニ據レバ大小ノ二屍ヲモト斂メシモノナリト

一　刀劍ニ擬ハシキモノ數個朽折シテ砂中ニ混入シアリタリ

一　五輪塔又ハ經塔ノ如キ層塔ノ最上層ニ建ツヘキ梢石ヲ觀音堂中ヨリ檢出セリ依テ土人ニ就キ其由來ヲ問フニ該石ハ元ト棺邊ニ委棄アリシヲ後此堂中ニ拾ヒ置ケリト

但觀音堂ノ爲メ層塔ヲ建シ傳說口碑ナシ

一　村老七十ノ說ニ石棺ノ露出セシハ凡四十年以來ノ事ニテ其前ハ恰モ棺上ニアタル所ニ松一株アリタリ且蓋石ノ北角微シク露ハレ漸ク全蓋ヲ見ルニ至レリト

一　同上此山以前ハ「ミサヽキ山」ト稱セシコトアリト又一老人八十二三既ニ耆シテ聞々人事ヲ稱セサルコトアリノ說ニ是ハ「ミサキ山」ト呼シト又當村ノ南半里許ニ松山村アリ村人前ノ觀音ヲ稱シテ「ミサキ觀音」ト呼リト

一　同上古來何故カ「テンノウ」祭ト稱シ每年正月二十日村民業ヲ休ミコノ山上ニ置酒スルヲ例トセリト」

備　考

一　立岡村字地名稱　水町　西俣　五反田　晩免　居ヤシキ　二枝　野田　西潤野　中潤野　東潤野

一　西潤野官山ニ於テ明治十六年ノ春平資盛ト彫刻シアル石棺ヲ發見セリ今試ニ之ヲ參見スルニ其構造晩免石棺ノ如ク精工ナラズトイヘ𪜈外形及ビ內部ノ模樣恰好酷ダ類似セルモノアリ

但本棺ハ晩免ヲ距ル僅二三町許而シテ其露出ハ最モ舊シ乃チ今歲七十二ノ里老其初ヲ知ラズト云

一　森木一瑞撰肥後國志略ニ善導寺村ニ五郎ノ王子ノ宮ト稱シ東帶セシ夫婦ノ像ヲ安置ス然レ𪜈未ダ何神ナルヲ知ラズト依テ今其村名ノ起ル所以ヲ原ルニ淨土宗西山派本山善導寺ハ舊ト此地ニ創建シ後故アリテ筑後ニ移轉スト云ヘ𪜈年代分明ナラズ蓋小西行長ノ暴學ニ遇ヒテ然ルカ

一　立岡ノ西南一里許ニ御領村アリ傳說ニ據レバ領蓋ト陵ト書セリト村內ノ字地名稱御手水、東原、西原、尻川　園田、

一　同郡波多村ニ陣內ト稱スル所アリ傳說ニ由レバ安德天皇行宮ノ迹ト云ヒ又平重盛ノ潛居セシ所ト云

一　下益城郡木原村ニ神社アリ立岡ヲ去ル北ノ方一里其由緒ヲ原ルニ治承二年正月平重盛采邑ノ鎭守トシテ阿蘇ノ祭ト壇安姬命ヲ合祀シテ六殿神社ト稱スト云々載テ社傳ニアリ且其末社ニ淸盛重盛ヲ

祭リ一ハ圓頂濶衣一ハ衣冠執笏ノ像ヲ安置ス特ニ重盛ノ奉納ニ係ル天國ノ劍（直刃燒長五寸九分）一振今猶神庫ニ儼存セリ

但豐臣氏ノ時當郡小西行長ノ封域ニ係ル小西行長耶蘇教ヲ奉スルヲ以テ神社佛閣盡ク燒毀スル所ト爲リ則チ本社ノ如キ其一ニ居テ古來ノ文書多クハ此時燒失セシト云

一　清盛累進シテ太政大臣ニ陞リ邑ヲ播摩肥前肥後ニ賜ヒ大功田ト爲シ世襲セシム云々日本外史ニ見ユ

一　傳說口碑ニ據レハ肥後南半國綠川ノ限リ都テ重盛ノ采邑ナリシト

一　上益城郡菅村屋形ノ原（一ニ鯨ノ原ト書ス又タチノハヘ[illegible]ト云フ）ニ神社アリ傳說又ハ里老ノ口碑ニ據レハ重盛實ハ京都ニ薨セズ潛ニ彌平兵衛宗淸等ノ家臣ヲ從ヘ當國ニ來リ韜晦以テ終身ノ地ト定メシト是其遺蹟ニシテ社ハ即チ其靈ヲ祭リシ所ト明治維新後社名ヲ改テ小松神社ト稱ス

但當村ノ隣ニ內大臣川ヲ隔テ目丸村アリ所謂屋形ノ原ハ目丸村字內大臣ニアリ舊志ニ依ルニ內大臣山ハ菅村ニ屬スベシト今之ニ從フ而シテ宗淸等ノ墓所ト稱スル所モ亦此近方ニ散在セリ今試ニ兩村字地總計ノ員數ヲ擧レバ菊城切　官頭　內大臣外九十二アリ

一　同上重盛潛居中義故ニ命シ安德天皇ヲ奉迎シテ此近方ニ行在所ヲ置キシト

一　同上內大臣山ノ麓若宮神社神官ノ家ヨリ近年重盛所持ノ欵識アル采配及ビ太刀鐔等ヲ發見セリト喧傳ス

一　阿蘇郡綠川村字川口（當國ヲ中斷セル南流綠川ノ水源）ニ神立山鷲峰寺ノ墟アリ其興廢年月其ニ詳ナラズ土人ノ說ニ由レバ寺址ノ傍ニアル一小區ハ安德天皇ノ寢陵ナリト云ヒ或ハ行在所ノ迹ト云ヒ素ヨリ一定ノ說ナシ然レトモ地勢內大臣山五ケ庄求麻那須米良等トハ接續ノ關係ヲ有シ殊ニ重盛潛居ノ迹ト稱スル屋形ノ原トハ距離僅一里內外ノ所ト云

一　阿蘇家傳卷七　大宮司雅泰ノ譜ニ治承年間平族ノ專橫ヲ憤リ菊池隆直ト俱ニ兵ヲ起スト雖モ安德天皇ニハ心ヲ盡シテ奉仕セリ然レ𪜈故アリテ其詳細ヲ記サズトアリ

一　八代郡興善寺村ハ元興善寺ト稱スル巨刹ノアリシ所乃チ治承二年內大臣平重盛ノ代官肥後守貞能國中ニ七大伽藍ヲ建立セシ是レ其一ナリト貞能ハ筑後守平家貞ノ子ナリ

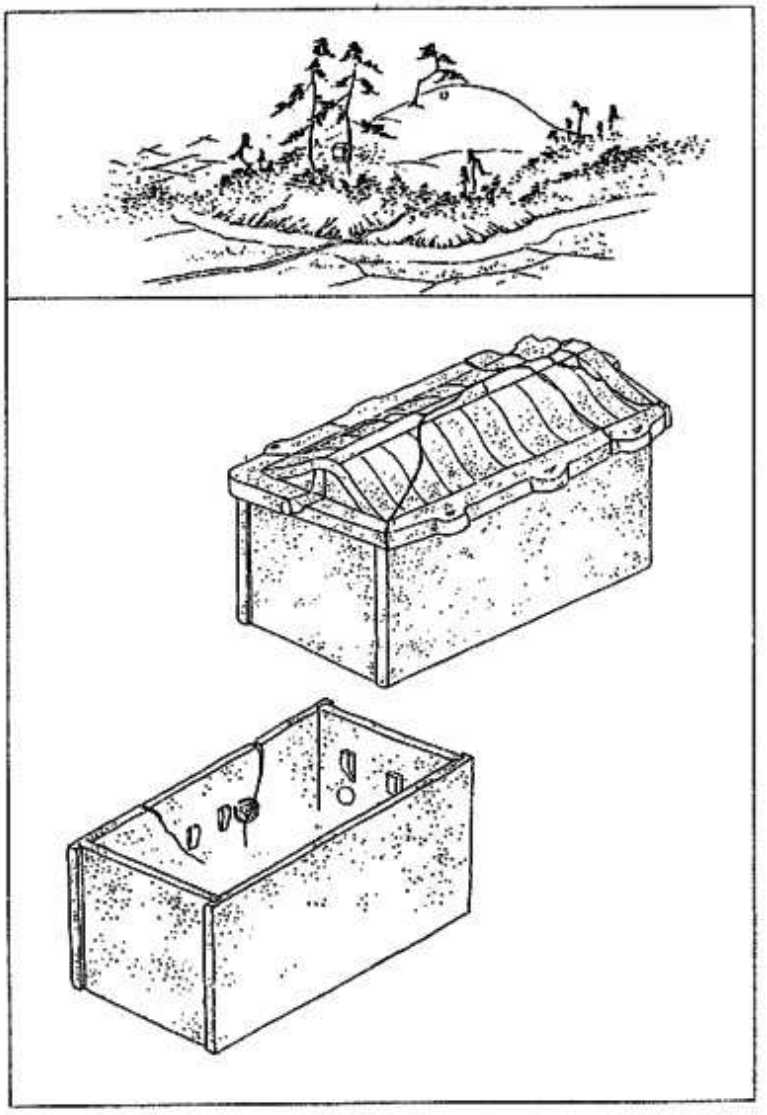
一　同郡五ケ庄ハ平重盛ノ三男淸經潛居ノ地ニシテ其子孫五家ニ分レ今ニ連綿スト（口碑）

一　柵谷元善編纂國史略要卷十四ニ云閑田耕筆ニ緒方三郎維義ハ平氏ノ純臣ナリ平軍ノ終ニ勝ベカラザルヲ料リ陽ニ源氏ニ降リ陰カニ天皇及ビ諸臣ヲシテ肥後ノ五ケ村ニ遁レシム戰破ルヽニ及テ海ニ投スル者多クハ其形ヲ僞ハルモノナリ云々

一　豐後國（郡村名ヲ失ス）ニ隱レ笠隱レ義ノ祭ト稱シ古來年〻祭ル（祭日ヲ失ス）サルハ村內ノ丁壯蓑笠ヲ着テ潛匿ノ狀ヲナシ之ヲ發覺シ得ザルト否トニ依テ年ノ豐凶ヲトスト蓋シ　乘輿潛幸ノ狀ヲ撲シテ祭典トナシタルモノナリト云ヘリ

一　肥前國南高來郡ニ安德村ト稱スル所アリ（字土橋西直崎七番）村ノ東濱ニ石龕ヲ安置ス是則　安德天皇ヲ祭享セシ所ニシテ土人ノ口碑ニ由レバ帝船此ニ着セシト云ヒ又ハ寶冠漂着セシ所トモ云

肥後國宇土郡立岡村晩光之石棺



(『帝國古蹟取調會々報』第3号)

宇土市大字立岡西潤野古墳

富　樫　卯三郎

昨年の春さき立岡の山に石櫃があるということを区長の井上氏から聞いた。それは石蓋だけで、側壁の石がなく、もう一つ小さな石櫃があるとのことであった。その後6月21日本校社会部員数名を伴い、調査した。なお9月24日、本校文化祭展示のため調査を重ねた。

そこは宇土市大字立岡字西潤野866番で、地主岡本嘉一郎氏所有の山で、俗に坊主山とよばれ、立岡から松橋へ出る道路左手の丘陵の突端に当り、標高は陸地測量部の地図によれば約20余米、東方すぐ近く曲野の堤が見え、西方すぐ近く宇土市の火葬場、さらに花園小学校が望まれる。この地方一帯によくある後期古墳の立地条件と同じく、丘陵見晴らしの位置を占めている。

一見した状況から以前誰か調べたことがあるのではないかと思われたが、発見当時掘られたままの姿であることは後に分った。坊主山の平坦部中央に幅約1.60米、長さ約2.70米、深さ約60～65糎のトレンチが掘られ、その底部には幅約55糎、長さ約1.70米深さ約23糎の長方形の土壙がその底を舟形にしてややくずれた状態を示し、土壙の南側に灰色の阿蘇溶岩の一枚石で作られた屋根形の石蓋が土壙の位置から引き上げられたままの形で、その裏面をみせ、立てかけてあった。石蓋にはつた草や苔が生えていたがその幅87～88糎、長さ2.08米で、縦の両端に各1個、横の両端に各3個の縄かけ突起があり、その長軸の方向は東西の線で、北へ25度かたよっている。石蓋はややかまぼこ形を呈しその頂部は縦に幅11糎で平らかに削られ、一応四注造りを示してはいる。しかし縄かけ突起は石蓋の四周に幅6～7糎に平らかに削られた面上からそのまま続いて作られていて、石蓋の側面厚さ10～10.5糎の半ば位までの厚さをなしている。8個の縄かけ突起はともに不揃いで、殊に石蓋北側の突起は形が全く十分でない。これらの突起は一見して縄かけとして用をなすものでなく、いわゆる退化した矩形断面を示し全く装飾化しているものとみられる。また石蓋が屋根形を示してはいるが、突起は屋根の部分につけられず、その屋根の裾の平面に続けて作られ竪魚木の意味はみとめられない。

土壙は雨ざらしのため形がややくずれ、その原形は明らかにできないが、長方形をなし、現在その床は舟形のようになり、粘土がその床面や石蓋と地面の接触のところに認められた。さてこの石蓋は土壙をおおっていた位置からそのまま南側に引き上げ、立てかけられたとみられるから土壙の上に下すと、ほぼもとの状態を推察することができよう。この石蓋が土壙と接する地面までの地表面からの深さは約60～65糎であるが、石蓋の東端がその西端より約6糎高い。石蓋の裏面は屋根形に応じて幅約60糎、長さ約1.70米、深さ約25糎の半円筒状にくりぬかれ、

その東端中央の部分約30糎のところが径7糎つき出した半円形にくりぬかれて、埋葬の際人体の頭部がその方面におかれ、伸展葬をなしていたらしい。

この報告のため発掘当時の状況について実見した立岡の二三の人々の談話によれば、今から30年ほど前に故松本嘉一郎氏が坊主山に松苗を植えようとして掘っていた時、唐鍬でうちあてたもので、石槨からは何も品物は出なかった。(岡本しき女談)すでに盗掘にあっていたかもしれないが、また副葬品は或は貧弱であったかもしれない。

この石蓋土壙へほぼ垂直のT字形に北へ3.50米離れた地点に、内法幅38糎、長さ87糎、深さ45糎で、石質はさきの石蓋と同じ石棺がある。ただ石棺の蓋はなく、また棺身の東側壁の石は殆んど失われている。さきの石蓋土壙とこの小箱形石棺は或るつながりのあるものではないか、或は家族的なつながりがあるものではないかとも思われる。

さて上記の石蓋土壙であるが、屋根形を示しているが、かまぼこ形で、四注造りをなしているが石蓋の四周は幅6～7糎の平坦な面が屋根の裾を囲んでいて、その平坦な面上に続き縄かけ突起が縦の両端に各1個、横の両端に各3個出ている。そこでこれを家形石棺の石蓋として見うるかどうかということに多少の疑問がわいてくると共に、もし家形石棺の方へかたむくとすれば相当退化したものという風に考えられなくてはならないようである。とにかくこの西潤野古墳は石蓋土壙と小箱形石棺ともに円墳をなしていたものと思われるが、石棺の型式的推移のうちで特殊な位置を占めるものとして注目されるものではないかと思う。

参考文献

日本考古学講座　5　古墳文化　河出書房
古墳とその時代　(一)　古代史談話会編
考古学辞典　　小林・水野編
古墳の話　　小林行雄

(『ともしび』第5号)

実測図・見取図出典

第7図・第8図　・昭和48年富樫卯三郎・宇土高校社会部実測
・高木正文他「熊本県装飾古墳総合調査報告書」熊本県文化財調査報告第68集、1984年、熊本。所収

第9図・第10図　・梅原末治「九州に於ける装飾ある古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919年、京都。所収

第15図　・富樫卯三郎「向野田古墳」宇土市埋蔵文化財調査報告書第2集、1978年、宇土。所収

女夫塚古墳（女塚）（宇土半島基部古墳群分布調査報告Ⅳ）

宇土市埋蔵文化財調査報告書第11集

昭和60年3月31日

編集・発行　宇土市教育委員会
熊本県宇土市浦田町51番地

印　　刷　㈲　下　田　印　刷